知床博物館研究報告 Bulletin of the
Shiretoko Museum 34: 83–122 (2012)

平成20（2008）年度
斜里町ウトロ遺跡下水道地点（A・B）発掘調査報告

豊原 熙司

Archaeological Excavation Report of Utoro Site, Shari, Hokkaido, 2008—Attending Drainage Work

TOYOHARA Teruji

例言

1. 本書は，北海道斜里町ウトロ東145番地に所在するウトロ遺跡（登載番号：I-08-1）の発掘調査報告書である．
2. 調査は，斜里町ウトロ地区下水道新設工事に伴う緊急発掘である．
3. 調査年度，期間，面積，調査体制は以下の通りである．
   - 発掘調査期間：2008（平成20）年6月1–30日
   - 調査面積：86 m²
   - 調査体制

     調査主体者：川名賢洋（斜里町教育委員会教育長）

     事務局：中川元（斜里町立知床博物館館長），松田功（斜里町立知床博物館学芸係長）

     担当者：松田功（斜里町立知床博物館学芸係長），豊原熙司（斜里町教育委員会臨時職員，雇用期間：平成20年6月1–30日）

     調査員：坂井通子（斜里町教育委員会臨時職員，雇用期間：平成20年6月1–30日）

     発掘作業員：朝倉實，小澤良子，佐藤富男，瀬尾博一，田中憲一，中山周，畠山一美，福永昌子，馬場亮一，前田祐二，元木哲之，若木敦，平田陽子
4. 本書の執筆は，調査に当った豊原がおこなった．また土器の図版以外は，豊原，坂井がすべて作成している．発掘に使用した測量機材，撮影機材等は豊原，坂井から無償で借用して調査を行った．
5. 鉄製品の所見については，豊原が笹田朋孝氏（愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター）に依頼した．
6. 黒曜石製石器の原産地分析については，豊原が井上巌氏（第四紀地質研究所）に依頼した．
7. 地形図，発掘調査区，遺構図，土層図等には，それぞれスケールを入れて縮尺比を示した．また図示している方位は，国土地理院発行の1/25,000地形図を除いて磁北である．
8. 遺跡の位置図は，国土地理院発行の1/25,000地形図「ウトロ」（平成19年），「知床岬」（平成19年）の一部を使用した．
9. 調査の際には，現地で次の方々にご教示をいただいた．涌坂周一，加藤春雄，熊木俊朗，高橋健，角達之助，松村愉文，瀬下直人，本吉春雄，青木利三，金盛典夫（順不同，敬称略）．また昼食時には，発掘に要する精密器材を隣接するセイコーマートウトロ店に保管いただいた．厚くお礼を述べる次第である．
10. 遺物整理，本書作成にあたり，次の方々から種々のご教示をいただいた．宇田川洋，宮夫靖夫，涌坂周一，熊木俊朗，佐藤宏之，高橋健，笹田朋孝，國木田大，角達之助，塚本浩司，榊田朋広，太田敏量，本吉春雄，武田修，加藤春雄，石川朗，松村愉文，瀬下直人，岡奈穂美，高瀬光永，尾田識好，石渡一人（順不同，敬称略）．

11．整理後の遺物等は，斜里町教育委員会（斜里町埋蔵文化財センター）にて保管している．

目次

例言 83
1．調査および報告書作成に至る経緯 84
2．遺跡の概要 85
3．下水道Ａ地点 85
4．下水道Ｂ地点 85
4-1．立地 85
4-2．グリッド設定，検出遺構 85
4-3．1号址 86
4-4．2号址 87
4-5．3号址 88
4-6．4号址 88
4-7．包含層及び攪乱層出土の遺物 89
5．まとめ 89
付篇1. 斜里町ウトロ遺跡下水道Ｂ地点出土の鉄製品 91
付篇2. 斜里町ウトロ遺跡下水道Ｂ地点出土石器の産地分析 92
報告書抄録 115
挿図目次
1図．遺跡位置図 94
2図．遺跡周辺の地形図 95
3図．遺構分布図 96
4図．土層図（0–16ライン） 97
5図．土層図（16–29ライン） 98
6図．1号址 99
7図．2号址 100
8図．3号址 101
9図．4号址 102
10図．土器（1–8） 103
11図．土器（9–18） 104
12図．土器（19–31） 105
13図．土器（32–45） 106
14図．土器（46–57） 107
15図．土器（58–72） 108
16図．土器（73–83） 109
17図．石器（1–14） 110
18図．石器（15–20） 111
19図．石器（21–24） 112
20図．2号址出土遺物（25–27） 113
21図．原産地分析石器 113
22図．東京大学発掘地点（1959年） 114
図版目次
図版1．下水道Ａ地点 116
図版2．下水道Ｂ地点（1号址） 117
図版3．下水道Ｂ地点（2号址） 118
図版4．下水道Ｂ地点（2号址） 119
図版5．上：2号址出土曲手刀子（右：Ｘ線写真），下：2号址出土鉄鏃（右：Ｘ線写真） 120
図版6．下水道Ｂ地点（完掘状況） 121
図版7．東京大学発掘地点（1959年） 122

1．調査および報告書作成に至る経緯

一般国道334号ウトロ道路改良工事の実施に伴い，住宅や施設に新設の下水道設備を整備するための工事計画が斜里町建設部水道課から提案された．2008（平成20）年度事業区域は旧音遠音別神社が祀られていたウトロ神社山と呼ばれる岩体の北並びに東側を通る場所が工事区域となっていたことから，この整備事業について町建設部水道課と教育委員会（知床博物館）とで協議を行った結果，当該地に遺跡が残されていることが判明し，発掘調査が必要であることを両者間で共有するに至った．工事時期について変更の有無を確認したが，平成20年度工事完了予定であるとのことから，2008（平成20）年度内に発掘調査を実施することとなった．

しかしながら，調査主体である教育委員会（知床博物館）は国道発掘調査を既に計画していたことから，斜里町内で過去にいくつもの発掘調査業務を依頼し実績を上げている豊原熙司氏並びに坂井通子氏に調査の依頼をお願いし，町道事業同様，実施に至ることができた．

なお，発掘当初は調査のみのお願いであったが，実際に発掘を体験した者が報告書を執筆することが良い報告書を仕上げることができると判断し，豊原氏に無理を言って無償で執筆をお願いし，本報告の完成に至ることができた．（松田功）

2. 遺跡の概要

ウトロ遺跡は，知床半島西側となるウトロ市街地の西側を流れるペレケ川から，東側を流れる幌別川までの平坦面に所在している．かつては，ウトロ海岸砂丘遺跡と称されていた遺跡である．調査地点は神社山（標高25m）の北側と東側とに分かれているが（1–2図），便宜的に北側をA地点，東側をB地点と呼称している．発掘調査箇所はB地点では標高約9.7 mで，A地点（調査区西端では標高8 m）方向に緩やかに傾斜している．

下水道敷設に伴う事前調査で，A地点の調査面積は59 m²（幅1 m，延長59 m），B地点では29 m²（幅1 m，延長29 m）である．

3. 下水道A地点

立地

調査地点は，北緯44°4′20.3″，東経144°59′38.6″（世界測地系）に位置している（図1, 2）．発掘箇所は，国道334号から港へ続く約3 m幅の生活道路として使用されていた．発掘調査は，この道路の中央部を幅1 mの範囲でおこなった．発掘区は再堆積砂であったために，調査中には何度かの崩落が生じている．また，発掘区の南側（神社山端）に水道管（ポリエステル管）が埋設されているとのことであったが，実際には調査区の中を屈曲して埋設されていたために調査時に接合部分が外れる断水も生じている．

この道路は，付近の住民の生活道路として人や車の往来で利用されていたことから，発掘箇所については隣接する商店やホテルの従業員集合宿舎，住宅の住人等と事前に打ち合わせをおこないながら作業を続けた．住民の車の出入りの関係で，その日の調査箇所は夕方には埋め戻さざるを得なかった．さらに，発掘によって生じる土砂の堆積場所も確保できないことから，発掘区の前後の箇所や住宅前を一時的な土砂置き場としての調査となった．

グリッド設定，土層

工事箇所の東側の北角を基準点（0）として，幅1 m，延長59 mの発掘区を設定した．表面の簡易舗装（4–5 cm）を除去後に，神社山から港に続く基盤（神社山から連なる岩盤）までの約2 mを掘り下げたが，結果としては全域で攪乱している再堆積土であった．調査中の聞き取りによると，1942（昭和17）年頃に知床半島の幌別川上流から鉄鉱石を採掘し，輸送のための道路を敷設した際に基盤となる岩盤まで掘り下げたとのことである．しかし実際には使用されることなく，その後に生活道路として現在の高さまで埋められたとの事であった（青木利三氏談）．

遺物

再堆積土の中から，擦文式土器片が1点，続縄文土器片（宇津内式土器）1点，石斧（19図22，凝灰岩製），有溝石錘（19図23，安山岩製），磨り石（19図24, 安山岩製）が出土している．このうち石斧は，表面と側面を敲打して形を整えている．また基部，刃部，裏面は入念に研磨されている．石錘の重量は1 kgを測る．

4. 下水道B地点

4-1．立地

発掘地点は，北緯44°4′8.6″，東経144°59′43.6″（世界測地系）に位置している（1–2図）．A地点と同じように，調査時には国道334号から港へ続く約3 mの幅の道路として使用されていた．発掘調査は，この道路の中央部を幅1 mの範囲でおこなっている．発掘区の西側には神社山が所在している．ウトロ郵便局とコンビニエンスストアーの間の狭い空間であり，人だけでなく車の通路としても利用されている．そのため，その日の調査箇所は夕方には埋め戻さざるを得なかった．遺構の検出時には，ビール箱やコンパネ等で固定し，その上をシートで覆って土砂を埋め戻し，翌日に埋め戻した土砂を再び除去しての調査となった．また，発掘によって生じる土砂の堆積場所が確保できないことから，発掘区の前後の箇所を一時的な土砂置き場とせざるを得なかった．

4-2．グリッド設定，検出遺構（2図）

発掘地点は神社山の東側で，かつて東京大学文

学部考古学研究室が発掘調査し（1959年），オホーツク文化期の住居址（1号竪穴）が検出された南西側に位置すると推測される（22図）．

下水道工事箇所の北東角を基準点（0）として，幅1 m，延長29 mの発掘区を設定している．調査区は1 × 1 mで，0–29グリッドである．

この発掘区からは，オホーツク文化期の住居址1軒（1号址），墓壙1基（2号址），続縄文文化期の住居址1軒（4号址），土坑1基（3号址）が検出された．しかし，いずれの遺構も調査区の幅が1 mと限定されているために，その一部が確認されたに過ぎない．

連続する土層図（4–5図）は，発掘区の西面となる南北方向を図示している．簡易舗装（厚さ4–5 cm）の下部は，15–45 cm程の厚さで埋め戻され攪乱しているが，舗装工事に関連すると考えられる．その下部には暗褐色砂（I層）が堆積している．この層は基本的な堆積であったと考えられるが，東西13ライン付近では厚く削られている．その下部は黄褐色砂（粗い砂層で基盤）となっている．しかし，これらの堆積は一様にはなっていない．

4-3．1号址（6図，10–18図）

調査の経過

攪乱層を除去すると，0–3グリッドで明るい褐色砂が確認され，続縄文初頭の土器，宇津内式土器，オホーツク式土器が包含されていた．この層を除去すると炭化物が多量に含まれた明褐色土（砂）となり，3グリッド付近から北側に落ち込んでいることから遺構の所在が推測された．

遺構

調査区で検出された規模は，南北4.2 mを測る．南側で住居址の立ち上がりが確認され，北側で粘土の貼床と焼土が検出されている．貼床は，東・西で認められ厚さ3–4 cm程である．検出されたのは，コの字形を呈した中央部付近と推測される．このうち東側の貼床は，更に東・北側に延びていると考えられる．焼土は西側の貼床東端に接して確認され，南北40 cm，東西25 cmの楕円形を呈し厚さ5 cmを測る．

層位

遺構内における土層の堆積は，舗装の直下は20 cm程の厚さで攪乱している．炭化物が多量に含まれた明褐色砂下部に褐色砂（黄色砂混じり），暗褐色砂が堆積し，住居址床面を覆っている．南側の壁の立ち上がりには，褐色砂（黄色砂混じり）が流れ込んでいる．4グリッド付近の層位は，攪乱層，暗褐色砂，黒色砂，黄白色砂，褐色砂であることから，最下部の暗褐色砂からの掘込みとも考えられるが，4ラインから南側45 cmの位置で水道管の埋設によって幅65 cm程攪乱していることから明らかにはできなかった．

遺物（10–18図）

床面からの遺物は検出されていない．床面を覆っている埋土の褐色砂（黄色砂混じり），暗褐色砂，南側壁付近の炭化物を含んだ黄褐色砂から，続縄文初頭の土器（11図9–13），続縄文期の宇津内IIa式土器（11図14–18，12図21），宇津内IIb式土器（10図1–2，12図19–20），オホーツク式土器（12図22–23）が出土している．オホーツク式土器の22は刻文，23は無文である．埋土上面の炭化物混じりの明褐色土（砂）からは，縄文晩期（13図37–42），続縄文初頭（13図43–45，58–60），宇津内IIa式土器（15図69，71–72，16図80），宇津内IIb式土器（16図74，83），オホーツク式土器（14図46–47，49–50，53），トビニタイ式土器（14図55–56）が出土している．

石器は，埋土下部から石鏃（17図1），石槍（17図2），削器（17図3），掻器（17図4），石斧（17図5：緑泥岩製），磨石（17図6：安山岩製）が出土している．また埋土とした上面の炭化物混じりの明褐色土（砂）からは，掻器（17図13–14），砥石（18図15–16：砂岩製），磨石（18図20：安山岩製）が出土している．このうち砥石（15）は側面も利用され，1 cm前後の幅で半円形の溝となっていることから，骨角器製作に用いられたと考えられる．

小括

発掘区北側で検出された住居址の一部で，南側で立ち上がりが確認された．床面からの遺物は検

出されていないが，貼床が構築されていることからオホーツク期と判断している．検出された貼床の長軸は南北方向である．住居址は北・東・西側に延びているので，かつて発掘調査がおこなわれている東京大学の発掘地点（東京大学1964）と隣接していると考えられる．また続縄文初頭，続縄文期の宇津内IIa式土器，宇津内IIb式土器が多数出土していることから，付近にはこの時期の遺構も所在していると推測される．

4-4．2号址（7図，10図，12図，20図）

調査の経過

15グリッドライン付近で検出された遺構である．舗装直下の攪乱層を除去すると，オホーツク式土器が伏せた状態で検出された．底部は粉々に砕けていたが，これは舗装工事に伴う土圧によるものであろう．この時点で遺構の所在を想定して掘り広げたところ，土器端から10 cm程西側で直径1–2 cmほどの大きさの小砂利（赤，白の玉石）を主とする海砂利が30 cm程の範囲に堆積していた．しかし，遺構は土器の下部に所在していると認識していたことから，この砂利の堆積に気付いたのは土器を取り上げた後であった．砂利の上部を3–5 cm程取り除くと下部に小片となった焼骨が平面状に分布し，その上に鉄製品（鉄鏃）が置かれていた．さらに骨を取り除くと，骨の上部と同じような状態で小砂利が敷かれていた．下面の砂利の厚さは，崩れてはいるが5 cm程であった．また伏せられた土器の下部，約40 cmの位置からは刀子が検出されている．

焼骨は目につくものはピンセットで取り上げ，焼骨が含まれていると考えられる玉砂利は，3 mmメッシュの篩をかけて細かな骨片の取り上げをおこなっている．

遺構

土器が検出された南東側は未発掘であるが，発掘区で検出された規模は，長軸（北西–南東）方向85 cm，短軸（北東–南西）方向1.05 mであるが，推定規模は長軸1.2 m，短軸1.05 mの大きさの楕円形を呈すると考えられる．また，推定墓壙の長軸は約40°西偏していると考えられるが，焼骨中心部とオホーツク式土器の中央を軸線で結んだ場合には50°西偏している．焼骨と土器とは20 cm程隔てており，焼骨と土器との高低差は土器から27 cm下部の位置となる．また，焼骨と土器下部から検出された刀子の高低差は，焼骨から15 cm下部となっている．遺構は土層の堆積状態から，暗黒褐色砂，暗褐色砂からの掘り込みと判断される．

層位

遺構と絡んでいない調査区西側における土層の堆積は，舗装下部が35 cm程攪乱層となっている．下部には黄色砂や小石を含んだ褐色砂，暗黒色砂が堆積している．

東面における土層の堆積は舗装の下部が攪乱層で，下部には黒褐色砂，褐色砂と黄色砂の混土（c），暗黒色砂，褐色砂と黄色砂の混土（c），黒色砂に茶褐色砂混じり，黒色砂に多量に黄色砂が混じった砂，黄色砂に褐色混じり，黒色砂等が堆積している．また攪乱層下部の黒褐砂の南側上面には，10–30 cm大の石が堆積している．

遺物

続縄文式土器，オホーツク式土器，石鏃，鉄製品，焼骨が出土している．

土器

続縄文式土器（12図24–29）は，埋土から出土している．口縁部破片（12図24–25, 30）は宇津内IIa式土器である．26–29は胴部破片であるために明確にはできなかったが，宇津内式土器と考えられる．オホーツク式土器（10図3）は遺構上面に伏せられた状態で置かれていたことから，墓壙上面の副葬品と判断できる．肩の張った器形で，刻文が施文された土器である．

石器

石鏃（20図25）が1点出土している．

鉄製品

副葬品として，鉄鏃と刀子が各1点出土してい

る．鉄鏃（20図26）は，遺構の北西側で検出された焼骨上面から出土している．鉄鏃は両端を欠き2つに折れ曲がっているが，現存する長さは8.7 cmで推定の長さは14.6 cmである．折れた部分が北向きに置かれていた．刀子（20図27）は，東側のオホーツク式土器の40 cm下部から出土し，先端部が南向きの状態となっている．基部方向の一部を欠くが，残存する長さは18.2 cmである．

小括

幅1 mと制約された調査で，東側が未発掘となっていることから，全容を捉えることができなかった．土質および色調の違いを基準として掘り下げたが，その結果においては墓壙の底は掘り込み面から約65 cmとなる．また，焼骨の下部約15 cmで墓壙の底となっていることから，焼骨は浮いた状態となっている．焼骨下部は埋土となっていることから，墓壙がある程度埋められた後に焼骨等が置かれたと推測できる．

4-5．3号址（8図，10図）

調査の経過

6–7グリッド付近で検出された遺構である．舗装の下部の攪乱層を除去した際に落ち込みが検出されたことから，遺構の所在が推測された．

遺構

西側は未発掘となっているが，検出された規模は東西85 cm，南北90 cmで，深さは掘り込み面から35 cm程となる．西側に延びていることから，東西（長軸）は推定1.2 mの楕円形を呈していると推測される．黄色の砂の混じった暗褐色砂からである．

層位

攪乱層の下部には，黒色砂（黄色砂混じり），褐色砂，暗褐色砂が堆積している．この埋土中には，15 cm前後の大きさの石が含まれている．

遺物

埋土中から，オホーツク式土器が出土している．図示した刻文の施文された土器（10図4）は，セクション面（8図）に露呈し，口縁部が下向きになっていた．

小括

オホーツク期の遺構と考えられる．遺構は発掘区の西側に延びているために全容を捉えることができなかったが，西側セクション面に土器が伏せられた状態で一部露呈していたことから墓壙と判断している．

4-6．4号址（9図，12–13図）

調査の経過

発掘区の21–25グリッドで検出された遺構である．舗装の下部の攪乱層を除去した際に，落ち込みが確認されたことから遺構の所在が予想された．落ち込みを掘り広げると，南北に大きな広がりとなっていった．

遺構

遺構の主体部が西側に延びていることから，全容を捉えることができなかった．発掘区で検出された規模は，南北3.4 m，東西85 cm，深さ60 cmである．遺構の北東壁付近には，20 cm程の大きさの石が3個検出されている．柱穴は検出されていないが，規模から想定して住居址と考えられる．埋土中からは，続縄文期の宇津内IIa式土器，宇津内IIb式土器，オホーツク式土器が出土している．

層位

舗装の下部は攪乱層となっている．埋土は暗褐色砂が遺構全面を覆い，中央部の下部に黒色砂，炭化物を多く含んだ暗褐色砂，褐色砂が堆積している．

遺物

埋土中から続縄文期の土器とオホーツク式土器が出土しているが，オホーツク式土器は小破片で少数である．続縄文期の土器は，宇津内IIa式土器（12図30）と宇津内IIb式土器（12図31，13図32–35）である．図示したオホーツク式土器（13図

36）には，横位の刻文と型押文が施文されている．

小括

遺構の東側の一部を検出したに過ぎず，全容を捉えることができなかったが，規模からして住居址と推測される．出土遺物から続縄文期の時期の遺構と考えられる．

4-7．包含層及び攪乱層出土の遺物（10図，14図，16–19図）

包含層から出土した土器，石器は，舗装下部の攪乱層の下部に堆積しているI層（暗褐色砂）として取り上げている．

土器

続縄文式土器，オホーツク式土器が出土している．そのうち続縄文式土器は，下田ノ沢式土器（16図78），宇津内IIa式土器（16図62–68，70），宇津内IIb式土器（16図73，75–77，82），後北式C2・D式土器（16図79）である．オホーツク式土器（14図48，51–52，57）は，1号址南側の暗褐色砂，黒色砂，黄白色砂，褐色砂からの出土である．オホーツク式土器には刻文が施文されているが，51–52には刻文と型押文とが複合施文されている．

攪乱層

宇津内IIa式土器（10図5–6），オホーツク式土器（10図7–8）が出土している．

これらの土器の分布状態をみると，続縄文式土器は1号址から南側のI層（暗褐色砂）に包含されている．これは基本的な堆積であったI層が，1号址の構築によって掘り込まれたことに起因すると考えられる．1号址の埋土に，続縄文期の土器が多数包含されていることからも裏付けられる．

石器

石鏃（17図1），石槍（17図7），削器（17図8–9），掻器（17図10，12），石斧（18図18：緑泥岩製），窪石（18図17：安山岩製），砥石（18図19：安山岩製），敲石（19図21：安山岩製）である．

5．まとめ

既に述べたように，下水道敷設に関わる1 × 26 mの狭い調査であったために検出された遺構の全容は明らかとはなっていない．検出された遺構は，オホーツク期の住居址（1号址），続縄文期の住居址（4号址），墓壙（2号址，3号址）である．1号址は南北方向が長軸となる貼床の住居址で，オホーツク期の刻文の時期と捉えることができる．

2号址は，火葬骨の埋葬された墓壙であった．管見のかぎり火葬骨が埋葬されている遺跡は，網走市モヨロ貝塚の一例である（米村1935, 1950）．火葬された人骨が検出されたのは第四発掘とされる墓址で，「平石を四角に立て，其の中に焼きたる人骨を入れあるを見る」とされ，「即ち4個の平石を方形に立て壁となし，其の内に人骨を入れ，扁平なる大石を以て蓋とし，其の上に砂をかけ上部に底面に穴ある土器を伏せて埋葬したるものなるが，後其上に海濱の砂の堆積せりと推定さる」（米村1935）と記述されている．また人骨の上部には，焼けた石鏃が1点検出される．写真のみで，図や火葬骨の所見等については掲載されていないので詳細については不明である．

焼骨の所見は瀧川渉氏に玉稿をいただき，掲載する事になっていたが，ある事情から中止せざるを得なかった．この経緯についてはいずれ何らかの形で述べる事にしたい．検出された焼骨の一部は，玉砂利が検出された時点では露呈していた．上部に被せた玉砂利が，崩れていたと推測される．上部の玉砂利を除去し，焼骨を露呈し取り上げをおこなっている．実測後に，玉砂利および周辺の砂を篩いにかけて細かな骨片まで取り上げをおこなっている．検出時の所見から玉砂利を5 cm程敷き，その上に焼骨と鉄鏃を置き，さらにその上を玉砂利（3–5 cm）で覆ったと判断される．埋葬されていた火葬骨には，大きな骨片が含まれていないことと火葬した痕跡も認められないことから，別な場所で火葬された焼骨の一部が当該地点で埋葬されたと考えざるを得ない．また土器の40 cm下部の位置から刀子が出土していることから，この位置にもう1体埋葬されていた可能性も否定できない．これらのことも含めて，多くの疑問が残さ

れている．

鉄製品は2点出土している．そのうち鉄鏃（20図26）は焼骨中から，もう1点は刀子（20図27）で，オホーツク土器（10図3）の30 cm下部から出土している．また，石鏃1点（20図25）は土器と焼骨との中間付近から出土している．これらは出土状態から，いずれも副葬品と考えられる．

3号址は西側が未発掘区となっているので，全容を捉えることができなかったが，楕円形の墓壙と判断している．

4号址は，東側の一部を検出したに過ぎないが，主体部が西側に所在する続縄文期（宇津内式土器）に構築された住居址と推測される．住居址外の南側からも遺物が出土していることから，遺跡は国道334号に広がっていると考えられる．

22図は，当該調査区と東京大学（1959年）の発掘調査地点との位置関係を把握するために，地形測量図（原図）を重ねたものである（註1）．共通する基準点が無いので確定できないが，ほぼ位置関係は合致していると考えている．東大発掘箇所の南側に隣接しているのはウトロ館で，現在はウトロ郵便局となっている．この図から判断すると，当該調査区は当時のウトロ館の西側となり，発掘された1号竪穴（南角）から約3 m隔てていると推測される．当該調査区の14ラインで，2号址の北側1 mの位置である．このことから，1号竪穴（オホーツク期，住居址，1959年）の北西側に1号址（オホーツク期，住居址），南西側に2号址（オホーツク期，墓壙），西側に3号址（オホーツク期，墓壙）がそれぞれ所在していることになる．

最後に，遺構から出土している黒曜石製石器の産地同定をおこなっているので触れておく．1号址埋土下部4点，2号址埋土1点である．このうち1号址の4点（17図1–4）は，いずれも所山II（置戸町），2号址の石鏃（20図25）も所山IIである．また，分析結果の相関図はウトロ遺跡町道地点の産地分析と一緒におこなっているために，ここでは掲載していない．井上巌（2012）による町道地点の報告を参照していただきたい．

註および参考文献

註1　使用した東京大学の発掘当時の地形測量図（1959年作製）と写真（図版7）については，保管している東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設の熊木俊朗氏に使用承認をいただいている．また地形測量図（1959年），写真の検索については，笹田朋孝氏にお世話になった．

参考文献

宇田川洋ほか　1971　「相泊遺跡」『羅臼』羅臼町教育委員会

宇田川洋　1988　「アイヌ文化成立史」

熊木俊朗　1977　「宇津内式土器の編年—続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位（1）—」『東京大学考古学研究室研究紀要第15号』

熊木俊朗　2000　「下田ノ沢式土器の再検討—続縄文時代前半期の北海道東部における土器型式の動態—」『物質文化第69号』

東京大学　1964　「II宇登呂・羅臼の遺跡」『オホーツク海知床半島の遺跡下巻』東京大学文学部

藤本強　1966　「オホーツク土器について」『考古学雑誌第51巻第4号』

米村喜男　1935　「北海道モヨリ貝塚中の人骨埋葬に就いて」『人類学雑誌50-2』

米村喜男　1950　「モヨロ貝塚資料集」野村書店

涌坂周一ほか　1999　「知円別川南岸遺跡」羅臼町教育委員会

付篇1．斜里町ウトロ遺跡下水道B地点出土の鉄製品

はじめに

斜里町ウトロ遺跡における，下水道工事に伴う事前調査（2008年）が実施された．その際に墓壙（2号址）が検出され2点の鉄製品が出土している．副葬品とされる刀子・鉄鏃であるが，X線分析等について調査者の豊原熙司氏に依頼された．本稿では，これらの資料の所見について述べるものである．

曲手刀子

オホーツク土器の下部から出土している．茎尻を欠損している曲手刀子である（20図27，図版5）．残存長は18.2 cmである．刃部の断面をみるとやや偏心の両刃である．棟区は無く，刃区も緩やかなカーブを描く．片面には木質および樹皮の痕跡が顕著に残る．形態・サイズからオホーツク文化の墓に副葬される刀子としては標準的なものである．

鉄鏃

2号址（焼骨中）から出土している．有茎の鉄鏃で両端を欠損している（20図26，図版5）．2つに折り曲げられており，残存長を復元すると14.6 cmであり，欠損部分を入れるとかなり長い鉄鏃である．鏃身の断面は一辺が平坦に近く，鎬は確認できない．研究者に理解されやすいように，古代の東日本の出土鉄鏃に対する津野仁の分類（津野2011）を用いて説明すると，鏃身の形態から形式は「長三角形I式」である．関（せき）は不明瞭であるが「腸抉」というよりは「関」であり，篦被（のかつぎ）部分は「長」い，篦被の形態は「関」ないしは「無」であろう．

オホーツク文化では鉄鏃の出土事例が少なく，どちらかと言えば銛先鏃として使用されたと考えられている薄手の無茎鏃の方が多い．類例をあげるならば，開拓記念館所蔵の札幌西高等学校郷土研究部による礼文町船泊遺跡出土の鉄鏃がもっとも近い類例である．（笹田朋孝）

引用文献

津野仁　2011　『日本古代の武器・武具と軍事』吉川弘文館

付篇2．斜里町ウトロ遺跡下水道B地点出土石器の産地分析

はじめに

報告するのは，斜里町ウトロ遺跡下水道工事に伴う事前調査（2008年）の際に出土した黒曜石製石器の原産地同定である．分析試料は5点で，調査者である豊原熙司氏に依頼されたものである．5点のうち4点は，1号址（住居址：オホーツク文化期）埋土下部，残りの1点は2号址（墓壙：オホーツク文化期）から出土している．

実験条件

分析は，エネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子製JSX-3200）で行なった．

この分析装置は標準試料を必要としないファンダメンタルパラメータ法（FP法）による自動定量計算システムが採用されており，$_{6}C$–$_{92}U$までの元素分析ができ，ハイパワーX線源（最大30 kV，4 mA）の採用で微量試料–最大290 mm ϕ × 80 mm Hまでの大型試料の測定が可能である．小形試料では16試料自動交換機構により連続して分析できる．分析はバルクFP法でおこなった．FP法とは試料を構成する全元素の種類と濃度，X線源のスペクトル分布，装置の光学系，各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて，試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である．

実験条件はバルクFP法（スタンダードレス方式），分析雰囲気＝真空，X線管ターゲット素材＝Rh，加速電圧＝30 kV，管電流＝自動制御，分析時間＝200秒（有効分析時間）である．

分析対象元素はSi，Ti，Al，Fe，Mn，Mg，Ca，Na，K，P，Rb，Sr，Y，Zrの14元素，分析値は黒曜石の含水量＝0と仮定し，酸化物の重量％を100％にノーマライズし，表示した．

地質学的には分析値の重量％は小数点以下2桁で表示することになっているが，微量元素のRb，Sr，Y，Zrは重量％では小数点以下3–4桁の微量となり，小数点以下2桁では0と表示される．ここでは分析装置のソフトにより計算された小数点以下4桁を用いて化学分析結果を表示した．

表1． 化学分析．

試料名	Na_2O	MgO	$Al2O_3$	SiO_2	P_2O_5	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	Rb_2O	SrO	Y_2O_3	ZrO_2	Total	Rb (I)	Sr (I)	遺物番号	遺構・層位
ウトロ-23	3.9355	0.0000	12.6810	76.4391	0.2188	4.3011	0.9168	0.1763	0.0404	1.2440	0.0133	0.0117	0.0059	0.0160	99.9999	941	811	21図1	1号址埋土下部
ウトロ-24	3.9374	0.0000	12.5744	76.3431	0.2111	4.4600	0.9519	0.1587	0.0503	1.2607	0.0191	0.0101	0.0058	0.0175	100.0001	1,303	673	21図2	1号址埋土下部
ウトロ-25	3.9160	0.0000	12.3294	77.1089	0.2093	4.1479	0.8848	0.1665	0.0438	1.1515	0.0159	0.0105	0.0044	0.0111	100.0000	1,200	777	21図3	1号址埋土下部
ウトロ-26	3.9048	0.0000	12.5055	76.8430	0.2560	4.1646	0.8864	0.1560	0.0471	1.1899	0.0204	0.0104	0.0016	0.0144	100.0001	1,507	753	21図4	1号址埋土下部
ウトロ-27	4.0808	0.0000	12.5205	76.4838	0.2031	4.3774	0.8635	0.1969	0.0489	1.1894	0.0159	0.0068	0.0013	0.0118	100.0001	1,138	477	21図25	2号址

表2. 原産地対比.

試料名	原産地	遺物番号	遺構・層位
ウトロ-23	所山II	21図1	1号址埋土下部
ウトロ-24	所山II弱被熱	21図2	1号址埋土下部
ウトロ-25	所山II	21図3	1号址埋土下部
ウトロ-26	所山II	21図4	1号址埋土下部
ウトロ-27	所山II弱被熱	21図25	2号址

分析結果

表1に分析結果を,表2に分析結果に基づいて原産地を記載した．分析した5点の試料はすべて所山産のIIタイプで，そのうち1点は弱被熱している.（井上巌）

参考文献

井上巌　2000「東北・北陸北部における原産地黒曜石の蛍光X線分析（XRF）」『北越考古学第11号23–38p』

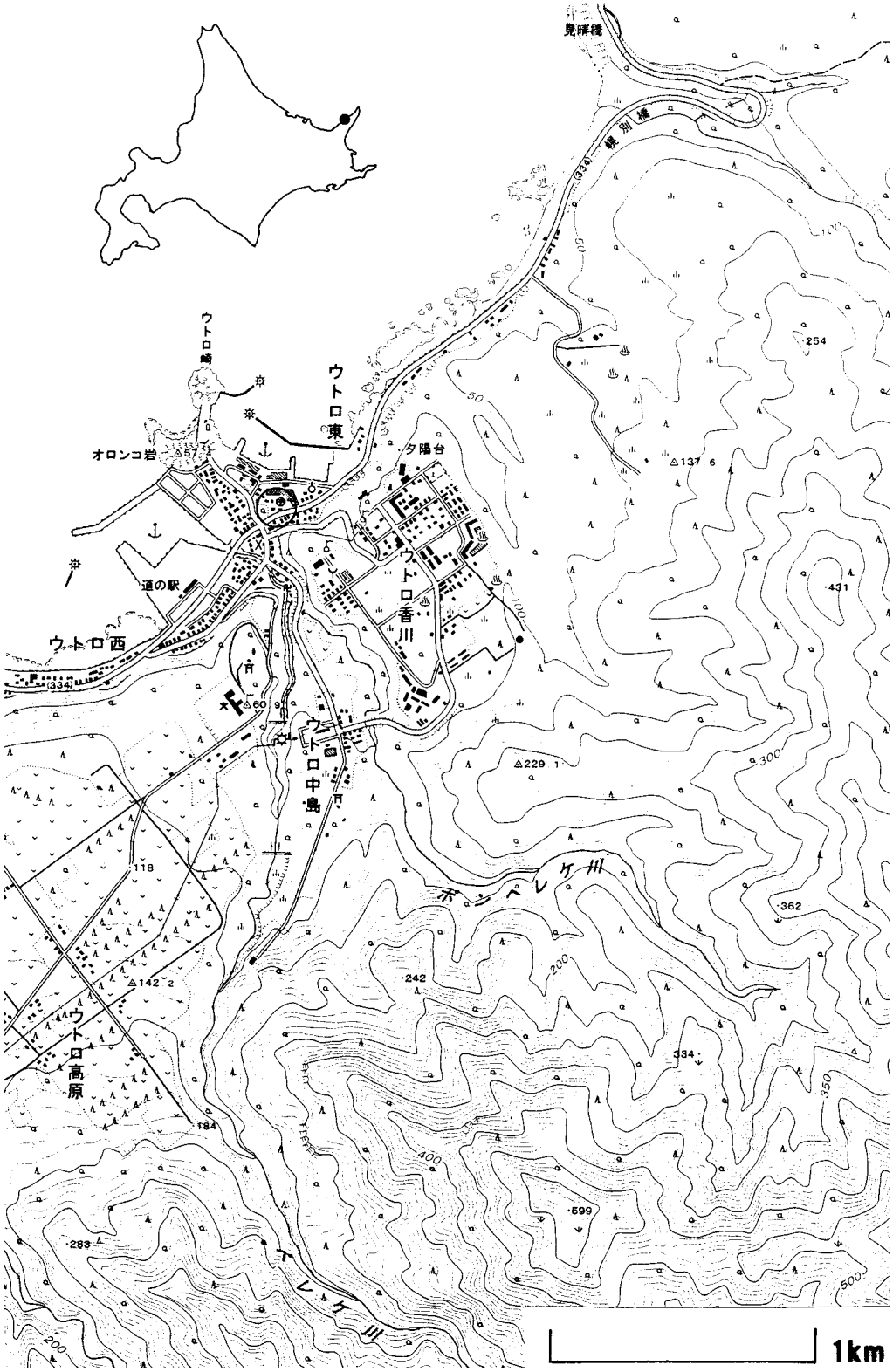
井上巌　2001「テフラ中の火山ガラスの同定に関する一提言」『軽石学雑誌第7号23–51p』

井上巌　2008『東北日本の原産地黒曜石　関東・中部・東海編』

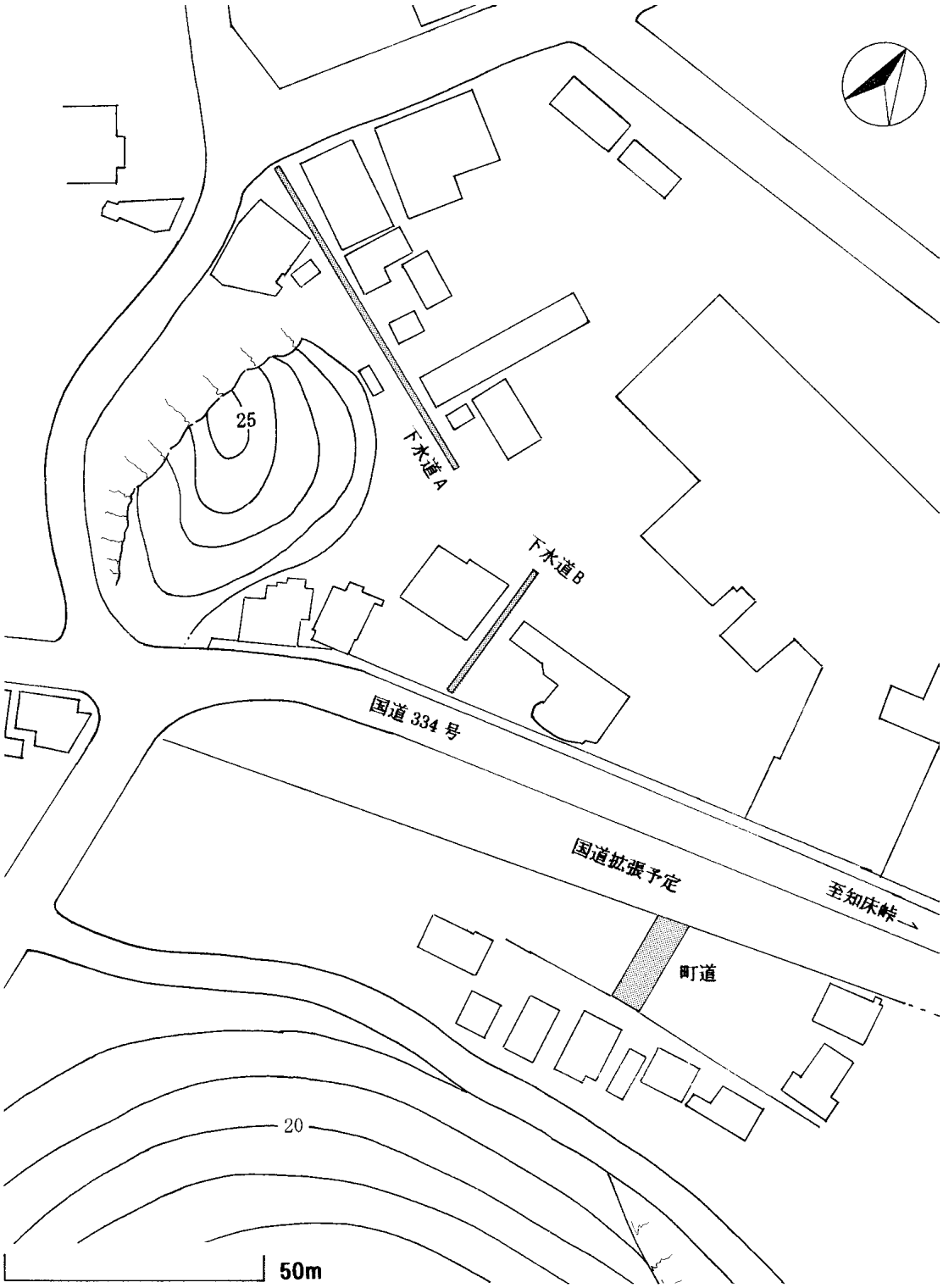
井上巌　2008『東北日本の原産地黒曜石　東北・北陸編』

井上巌　2008『東北日本の原産地黒曜石　北海道編』

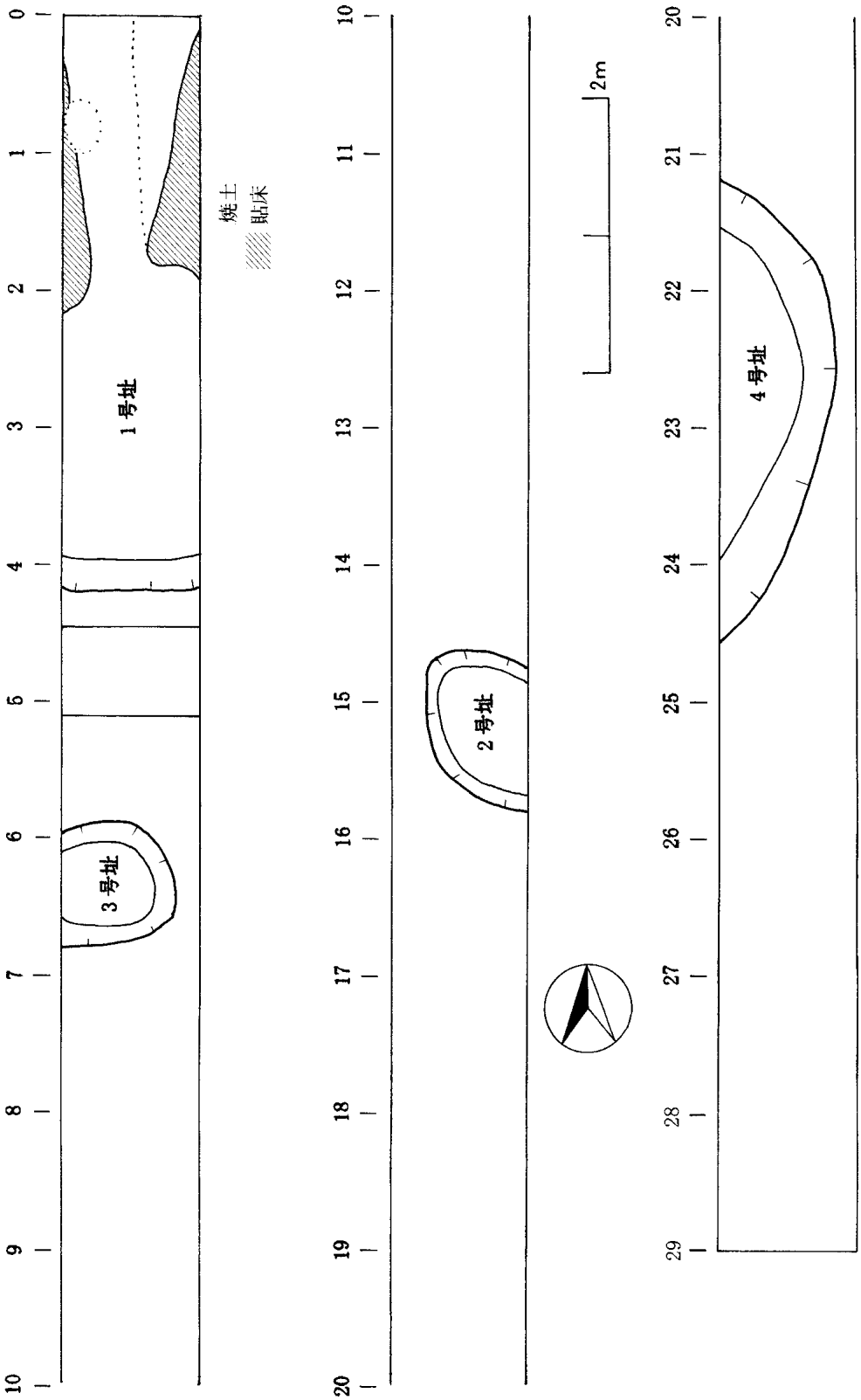
井上巌　2008『東北日本の原産地黒曜石写真集』


見晴橋
横別橋
334
ウトロ崎
ウトロ東
オロンコ岩
△57
夕陽台
道の駅
ウトロ西
ウトロ香川
△60
ウトロ中島
△229 1
ポンペレケ川
118
△142 2
ウトロ高原
184
242
362
334
599
283
トレトケ川
254
△137 6
431
50
100
200
300
350
400
500
1km

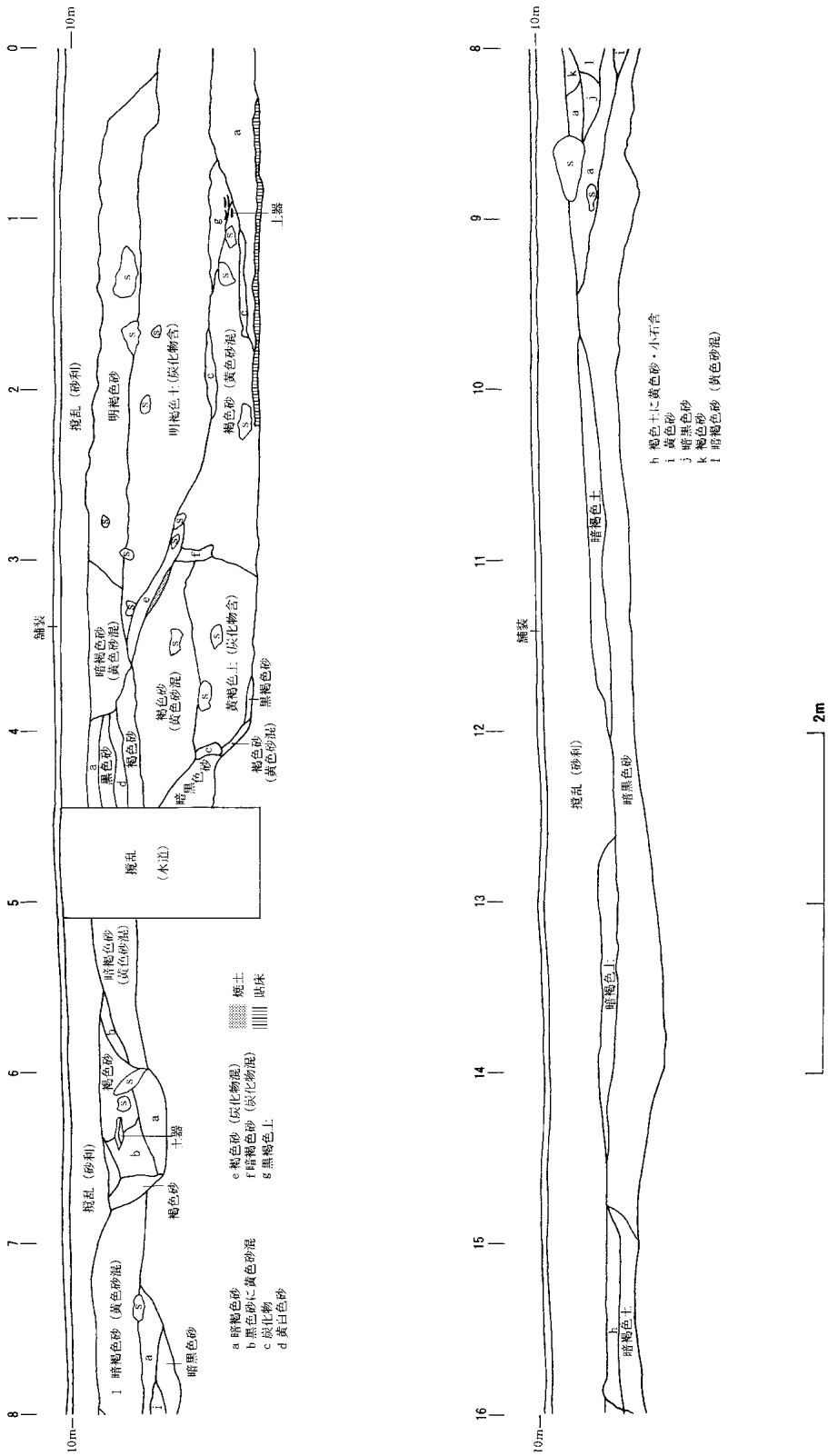
1図. 遺跡位置図.



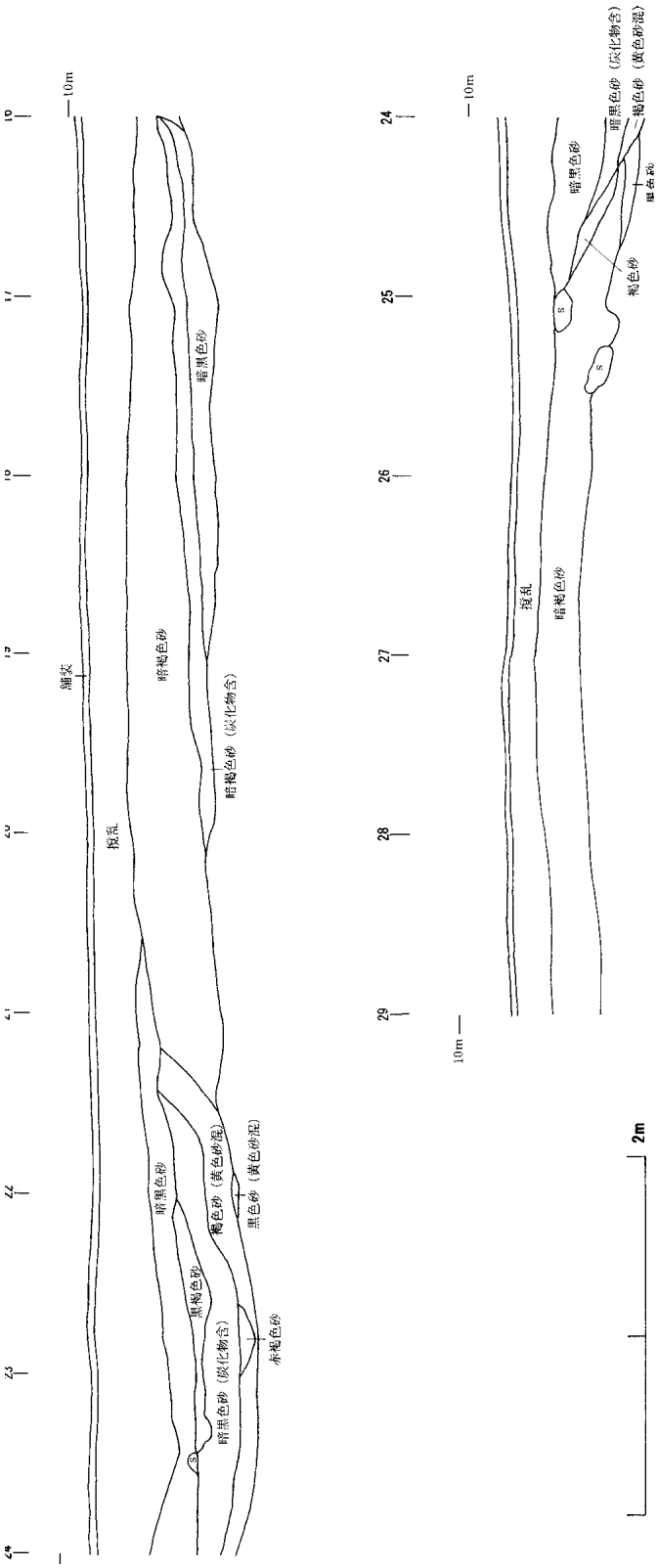
2図. 遺跡周辺の地形図.


焼土
貼床
1号址
2号址
3号址
4号址
2m
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29

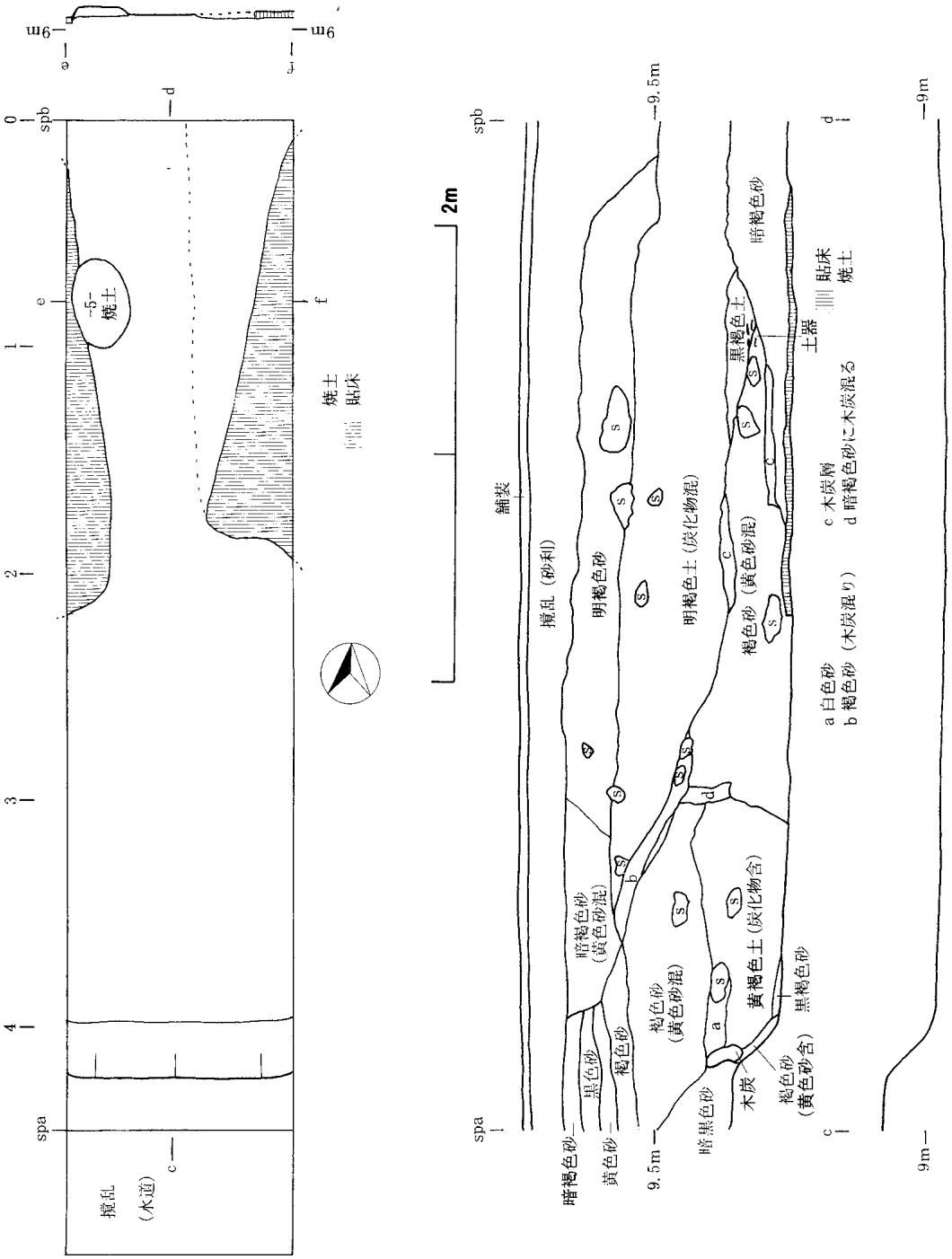
3図. 遺構分布図.



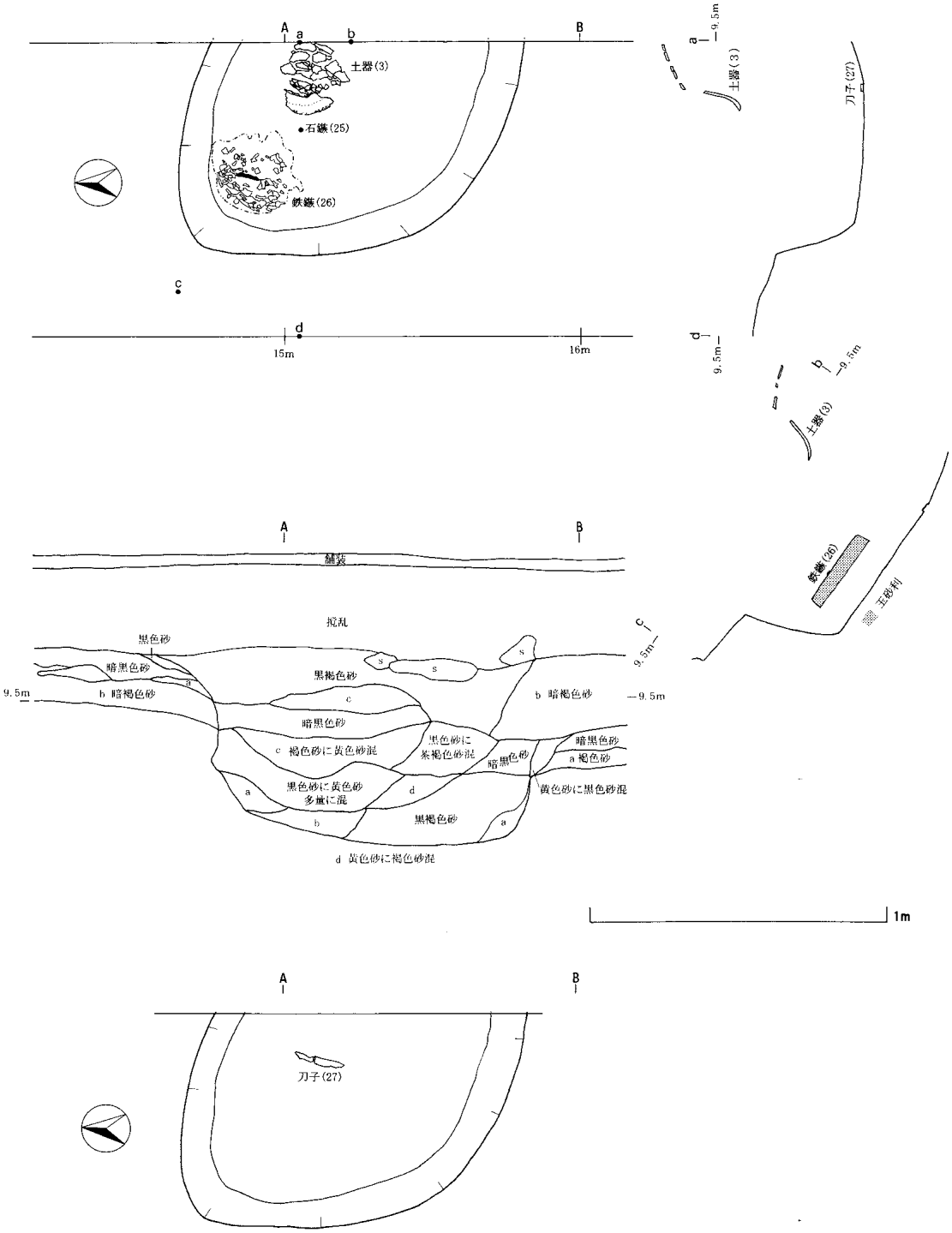
4図. 土層図（0–16ライン）.



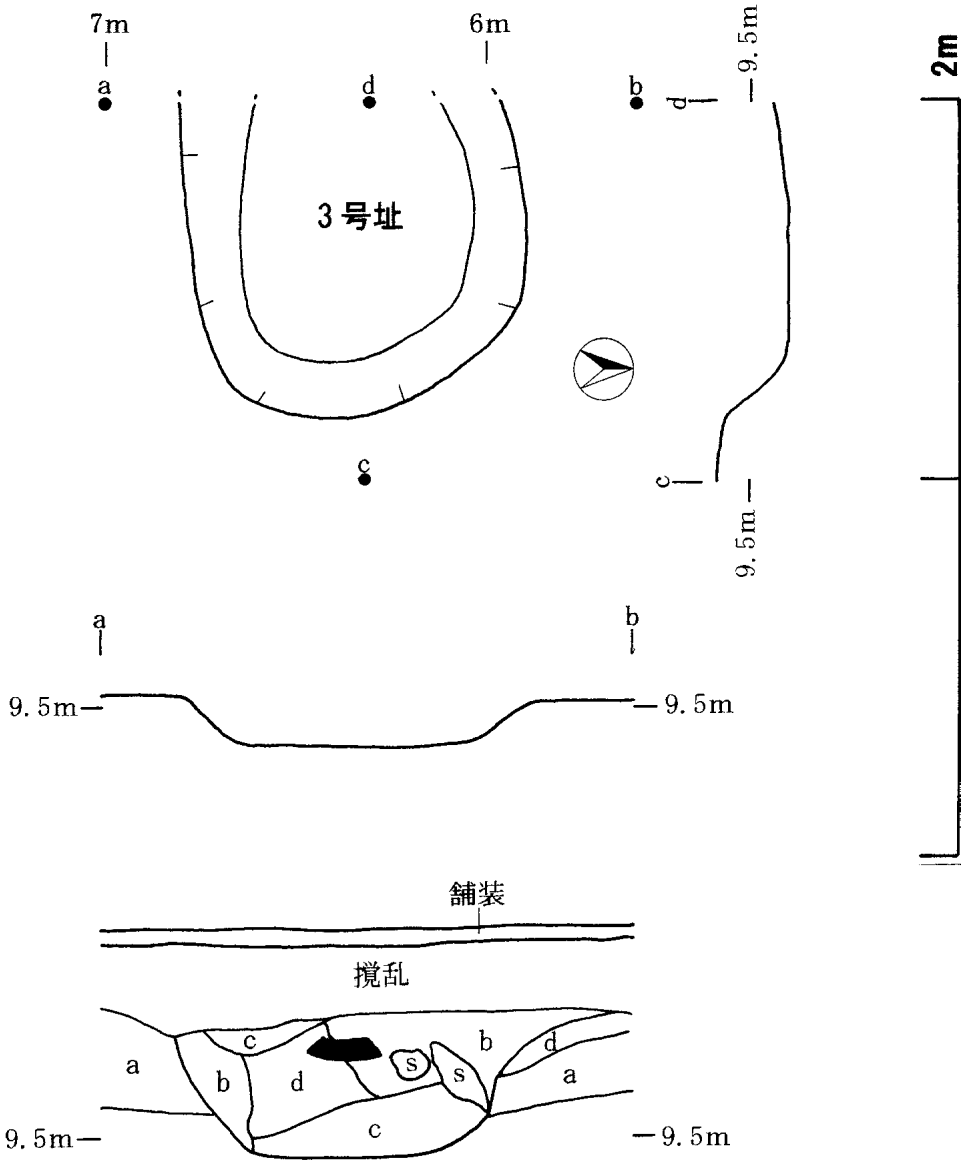
5図. 土層図（16–29ライン）.


9m
9m
e
f
spb
d
0
1
2
3
4
spa
c
-5-
焼土
焼土
貼床
撹乱
(木道)
2m
spb
9.5m
spa
9.5m
舗装
撹乱（砂利）
明褐色砂
明褐色土（炭化物混）
暗褐色砂
黒褐色土
土器
貼床
焼土
褐色砂（黄色砂混）
暗褐色砂
（黄色砂混）
黒色砂
褐色砂
褐色砂
（黄色砂混）
黄褐色土（炭化物含）
黒褐色砂
暗黒色砂
木炭
褐色砂
（黄色砂含）
a 白色砂
b 褐色砂（木炭混り）
c 木炭層
d 暗褐色砂に木炭混る
9m

6図. 1号址.

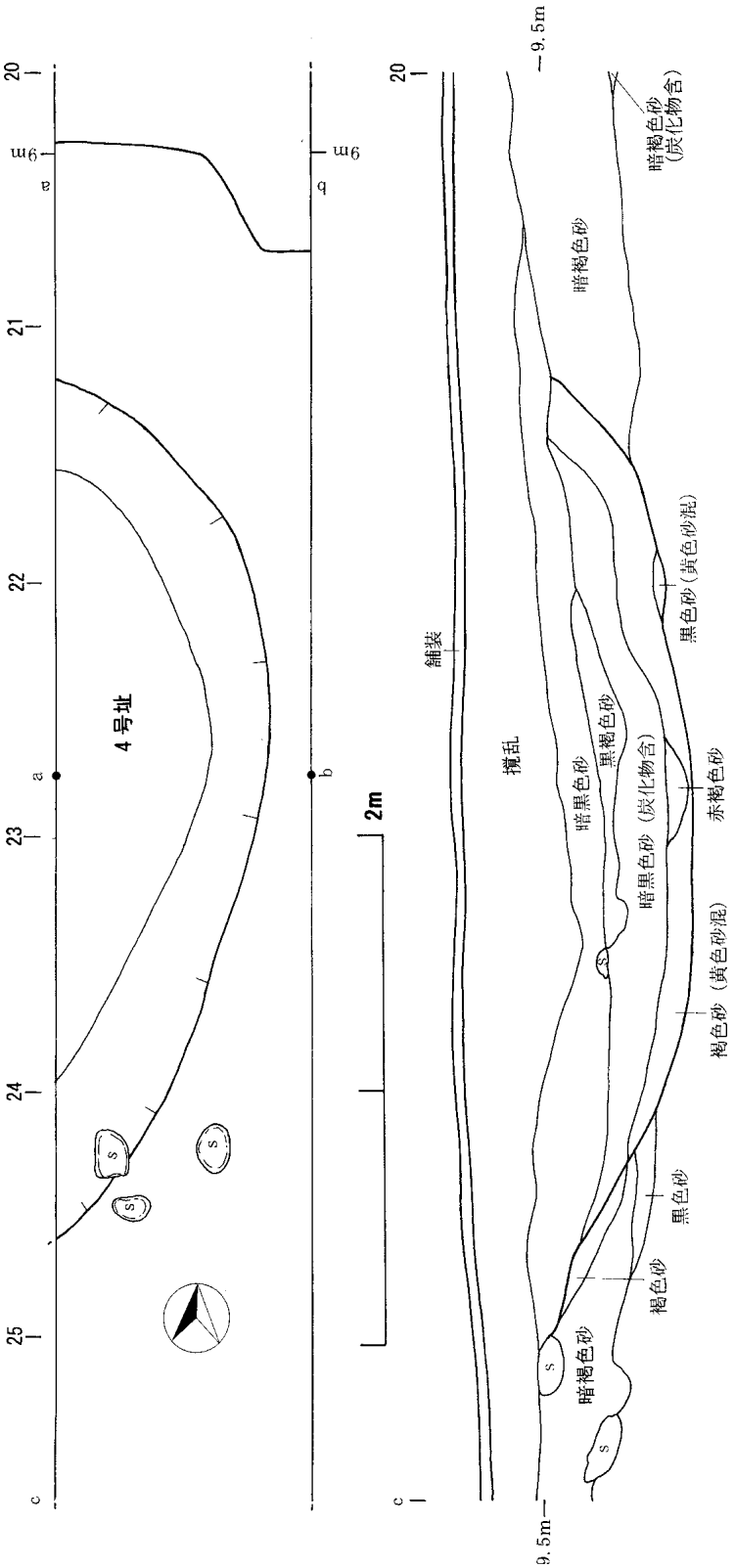

A
a
b
B
土器(3)
石鏃(25)
鉄鏃(26)
c
d
15m
16m
9.5m
刀子(27)
舗装
撹乱
黒色砂
暗黒色砂
黒褐色砂
b 暗褐色砂
c 褐色砂に黄色砂混
黒色砂に茶褐色砂混
暗黒色砂
a 褐色砂
黒色砂に黄色砂多量に混
黄色砂に黒色砂混
d 黄色砂に褐色砂混
1m

7図. 2号址.

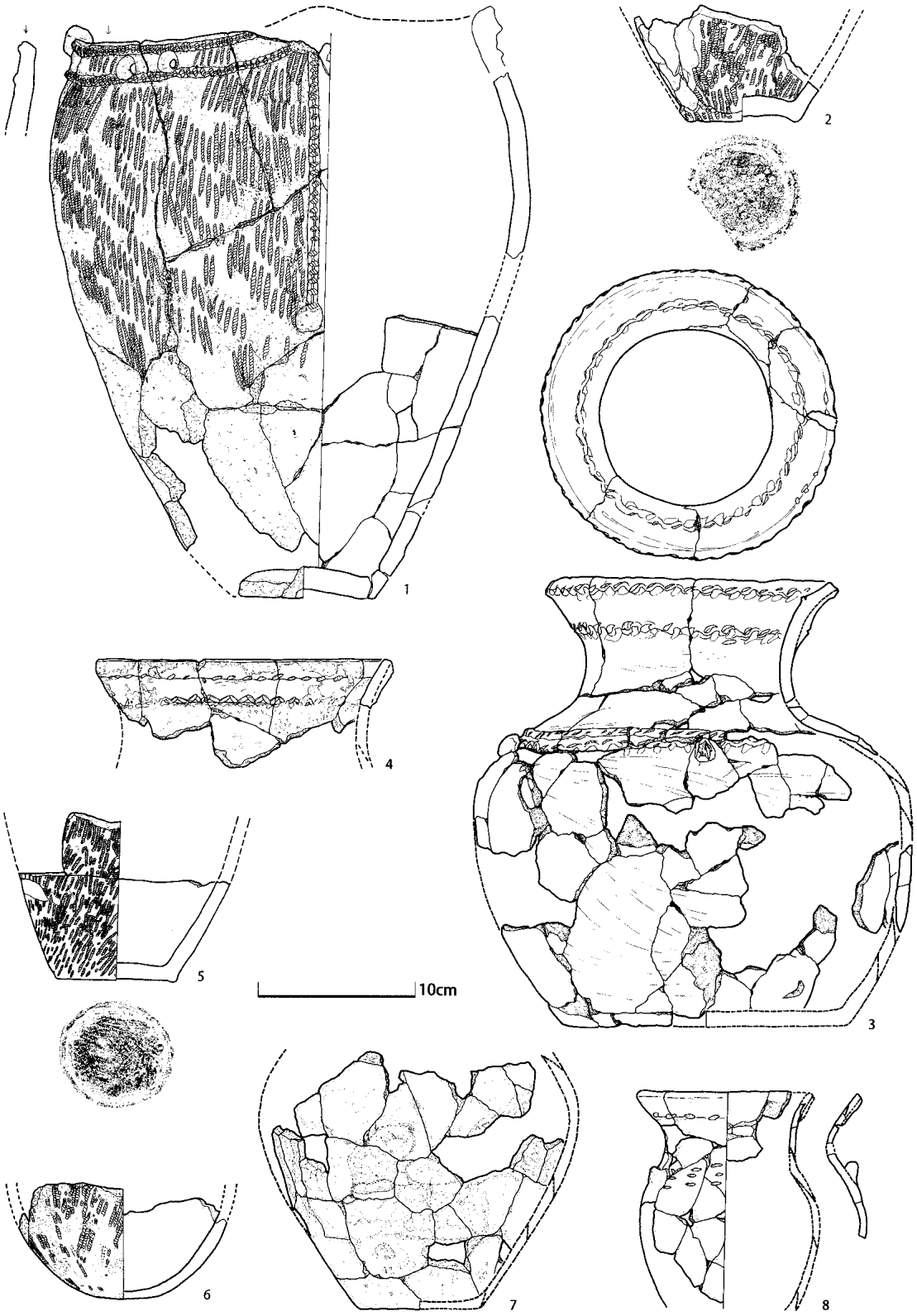


a　暗褐色砂（黄色砂混）
b　褐色砂
c　暗褐色砂
d　黒色砂（黄色砂混）　■ 土器

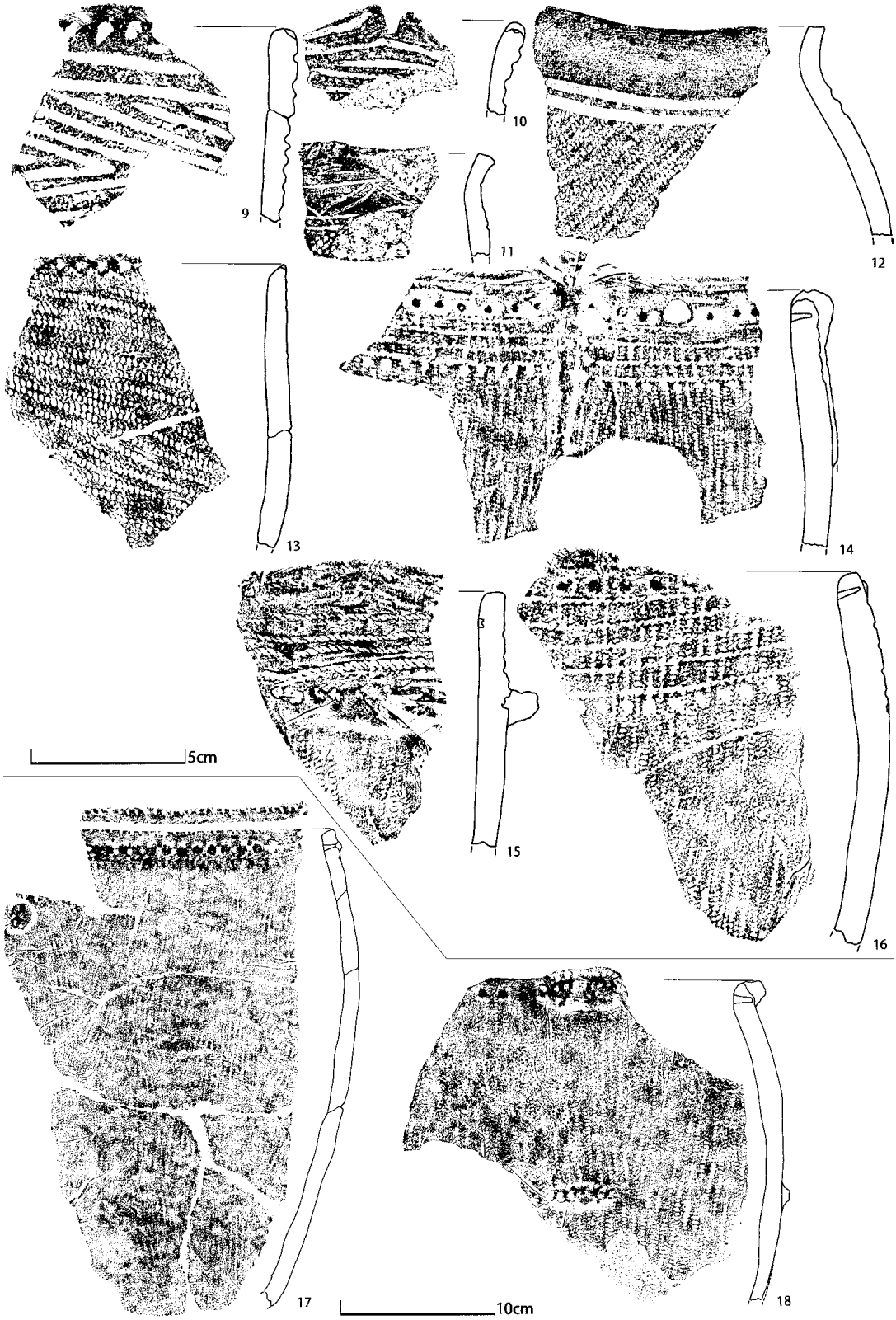
8図. 3号址.


20
21
22
23
24
25
c
9m
a
b
4号址
S
2m
9.5m
舗装
攪乱
暗褐色砂
暗褐色砂
(炭化物含)
黒色砂(黄色砂混)
黒褐色砂
暗黒色砂
暗黒色砂(炭化物含)
赤褐色砂
褐色砂(黄色砂混)
黒色砂
褐色砂
暗褐色砂

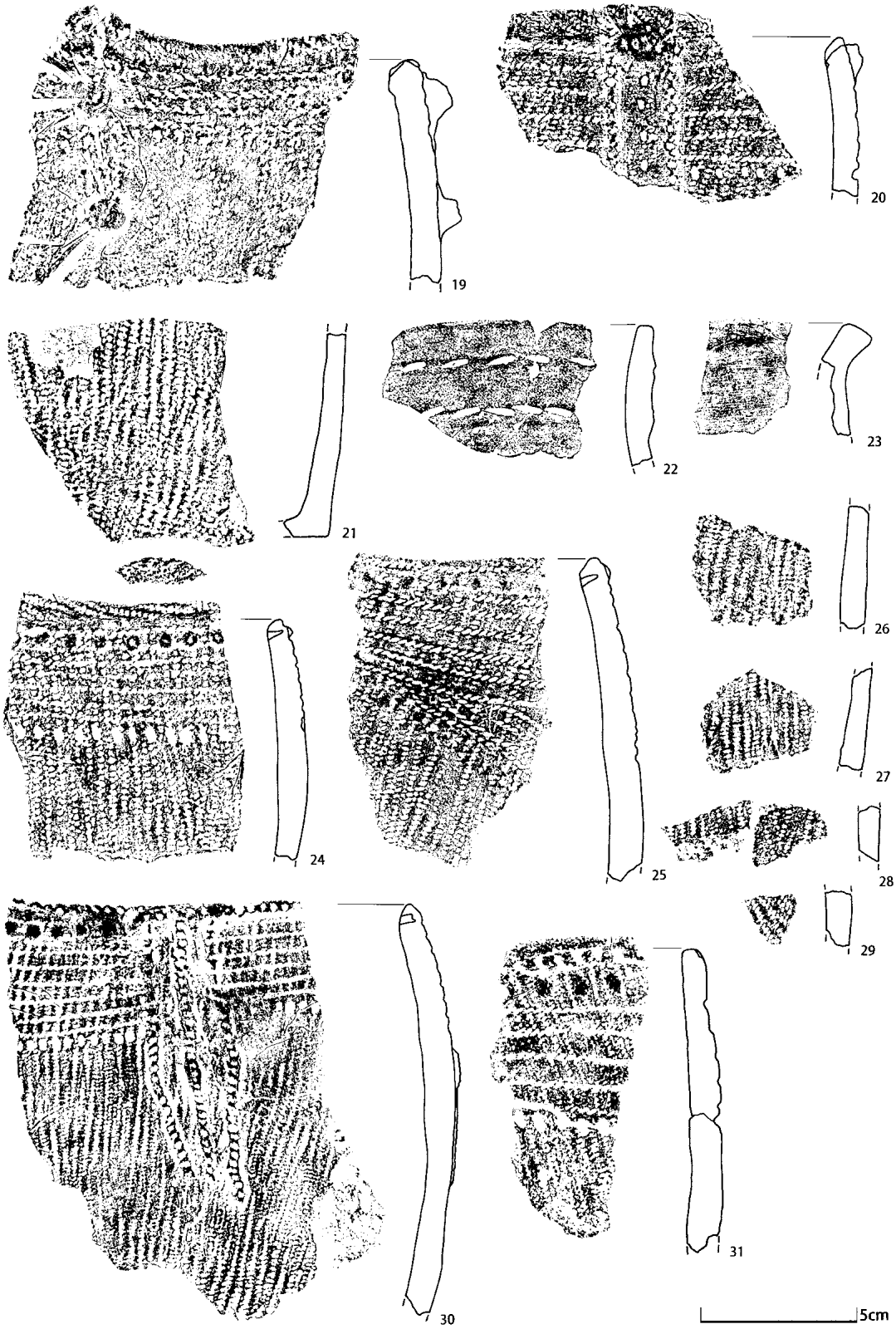
9図. 4号址.



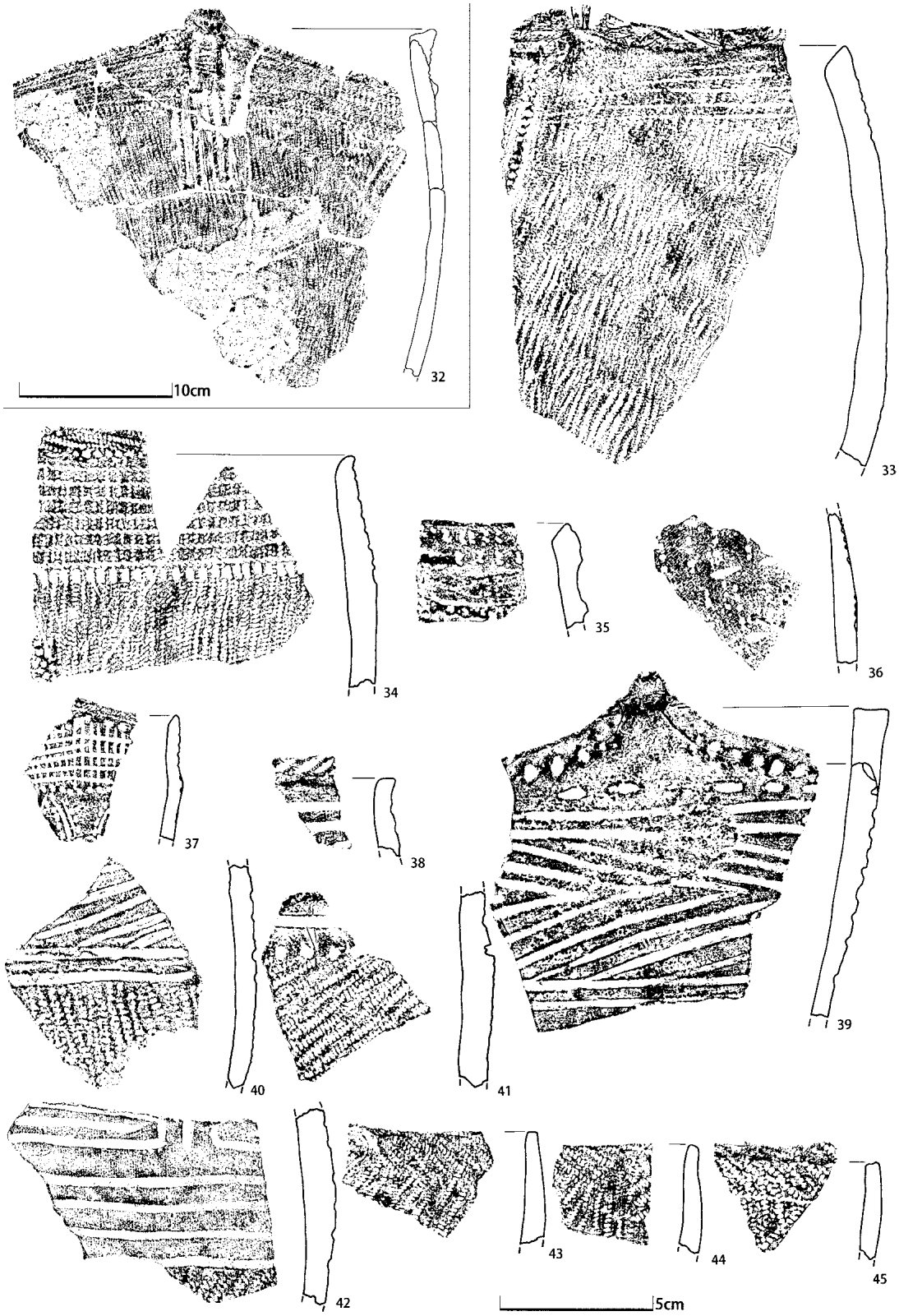
10図. 土器(1–8).



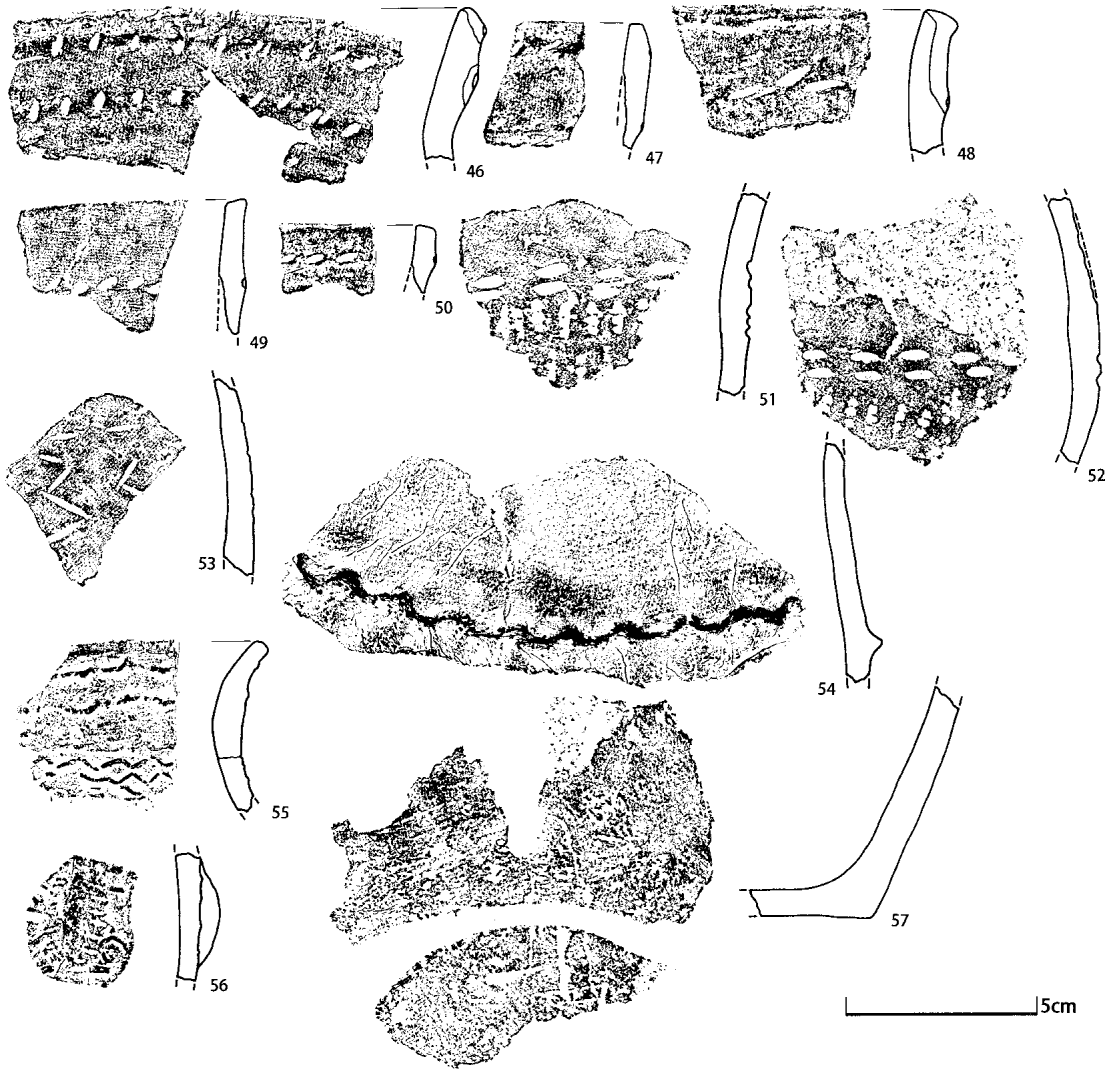
11図. 土器 (9–18).



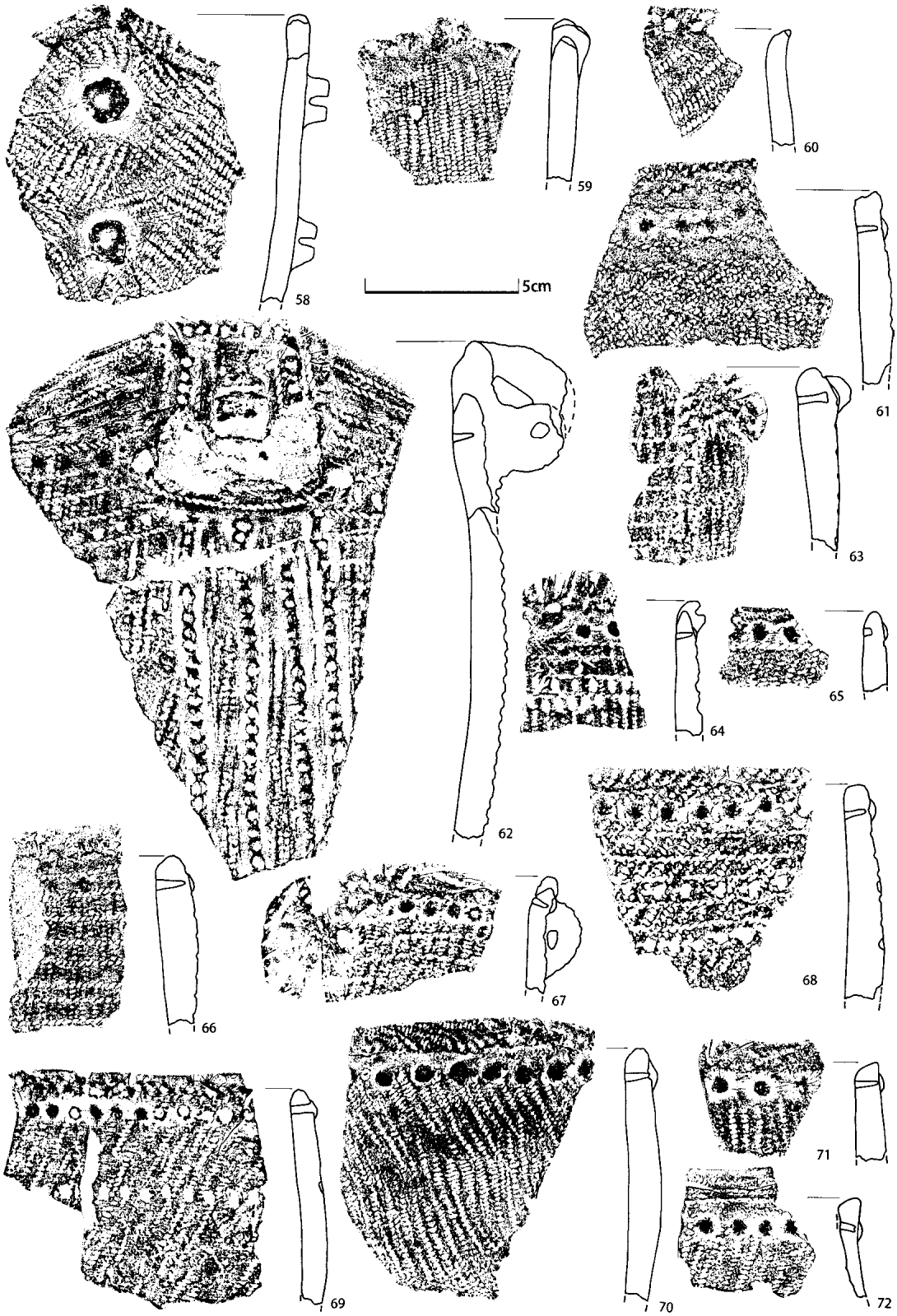
12図. 土器(19–31).



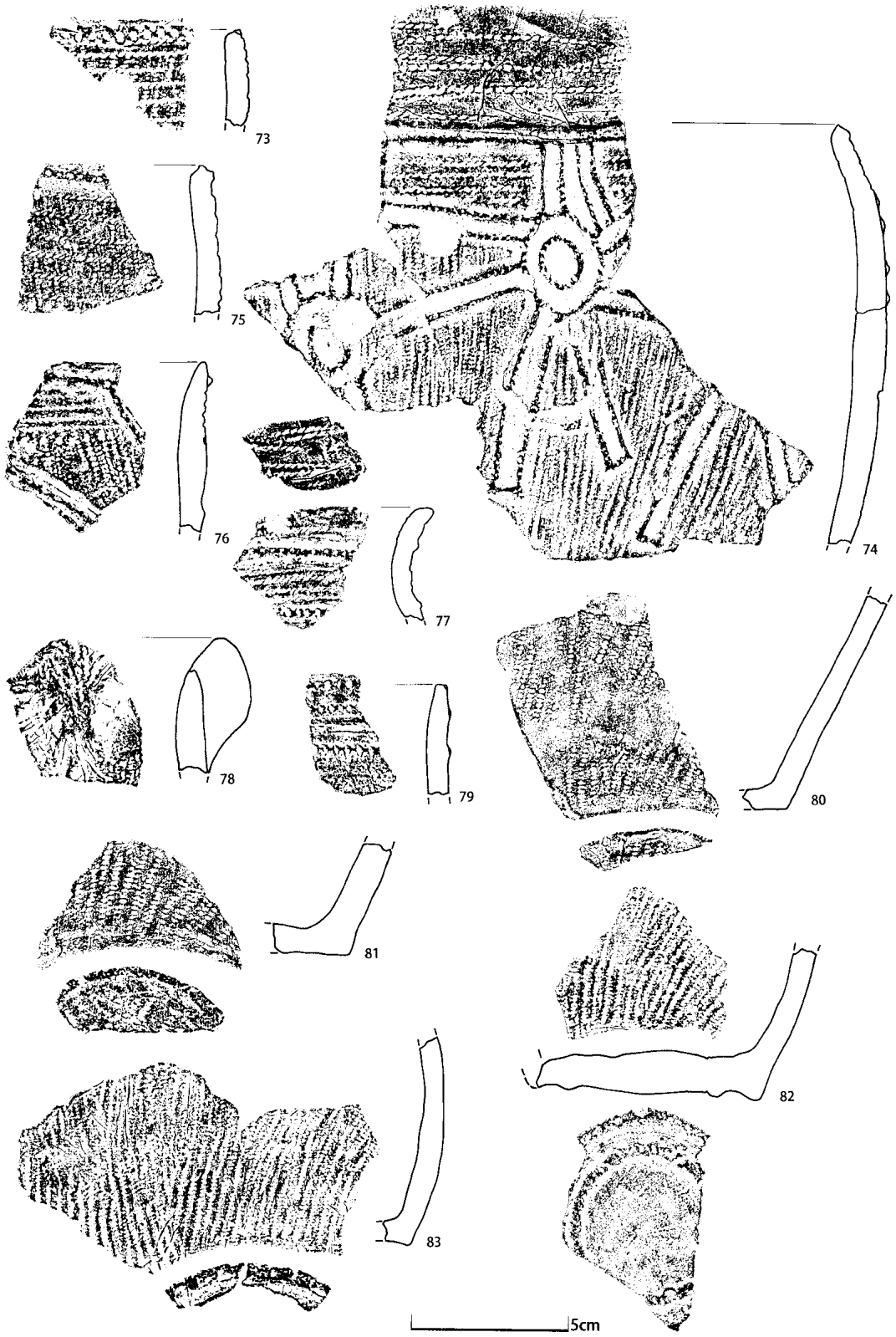
13図. 土器 (32–45).



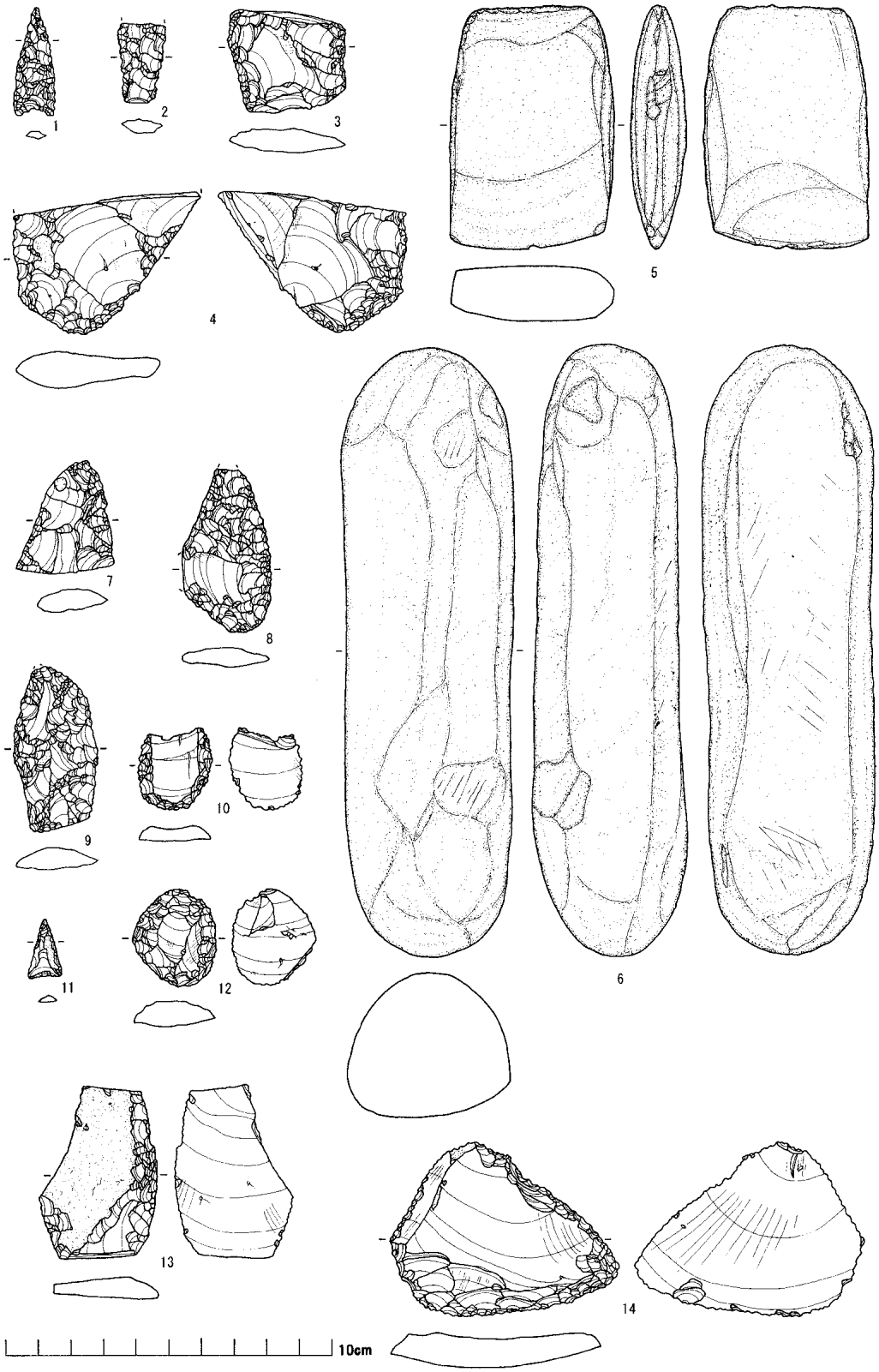
14図. 土器(46–57).



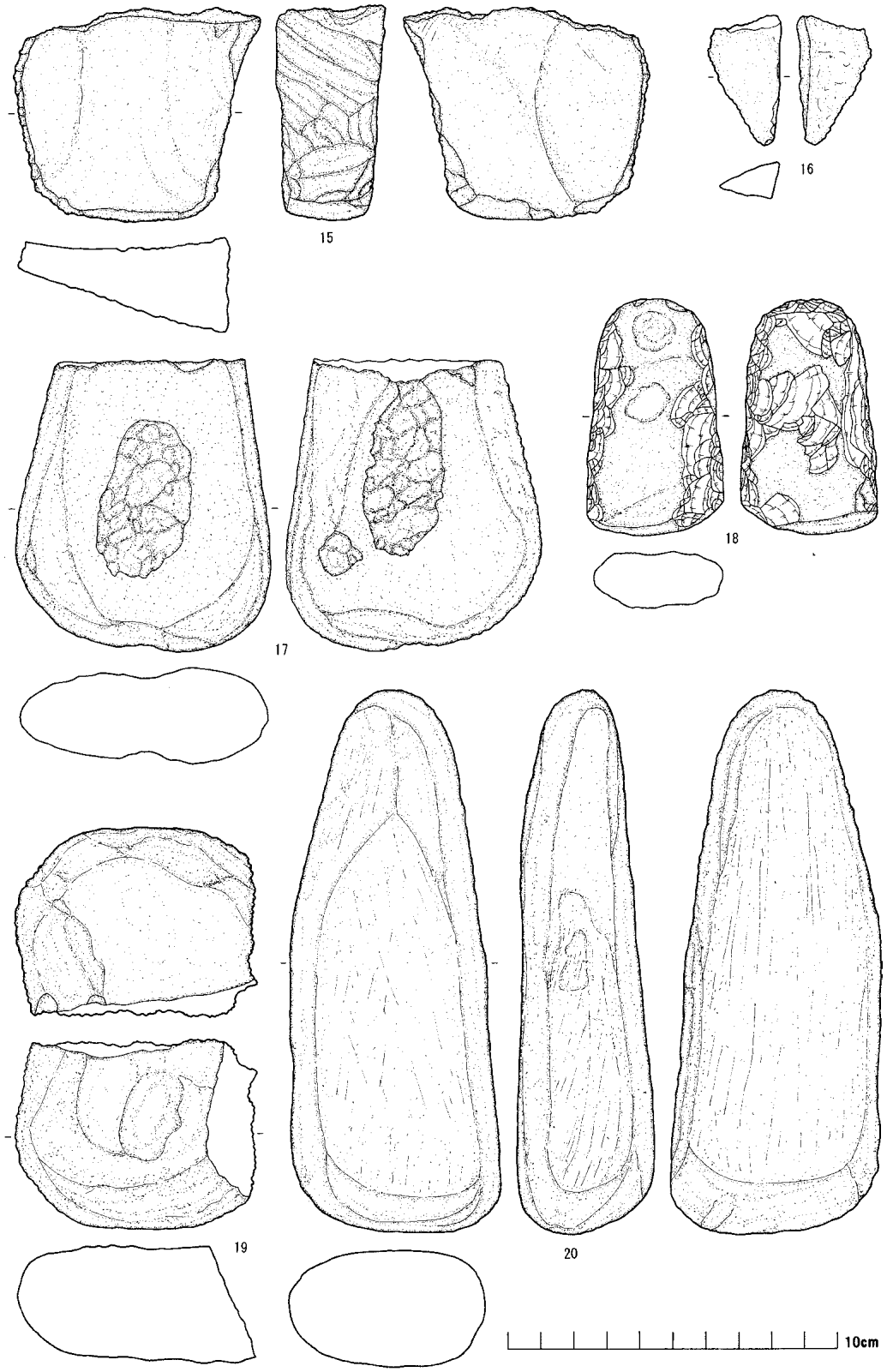
15図. 土器 (58–72).



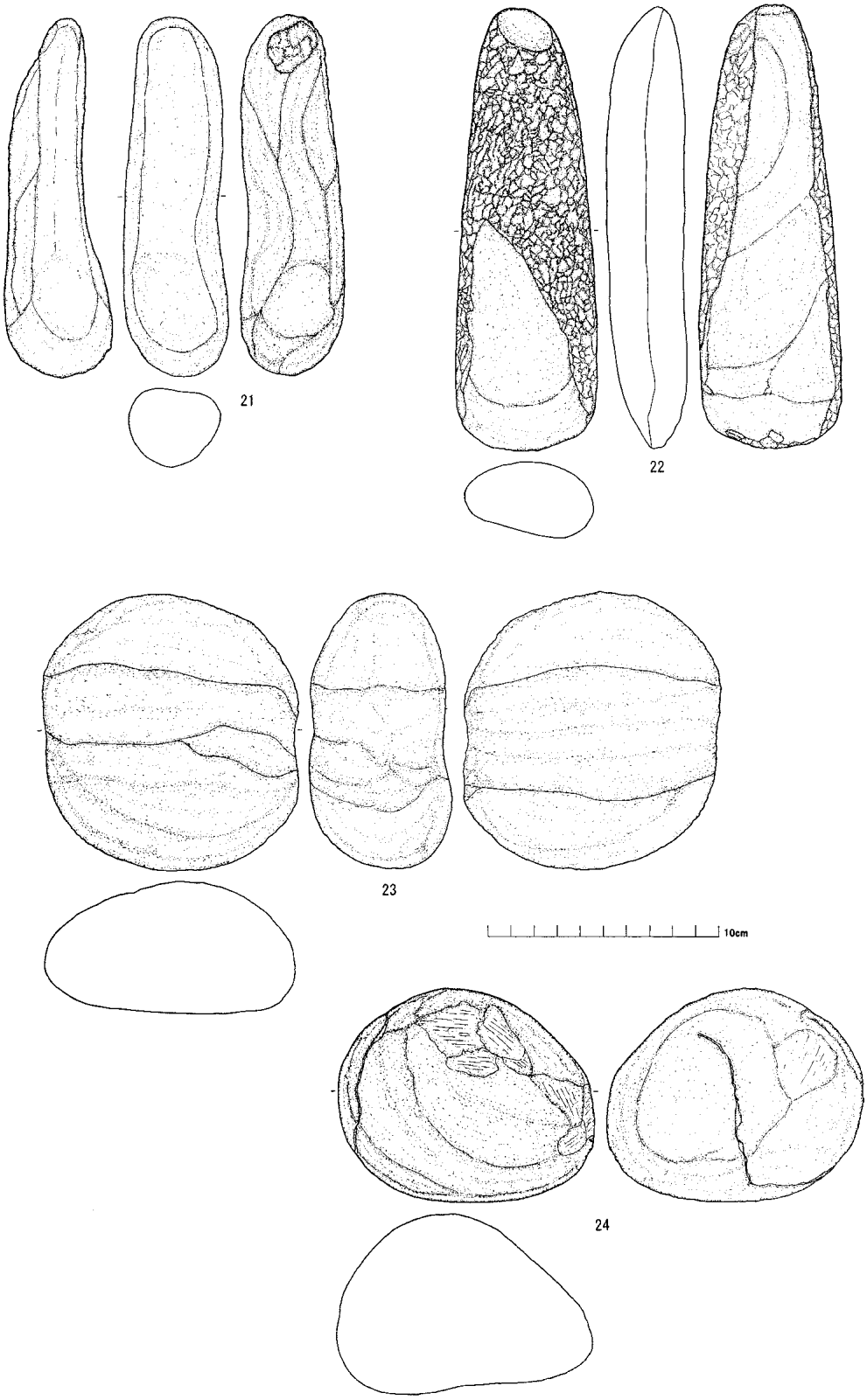
16図. 土器(73–83).



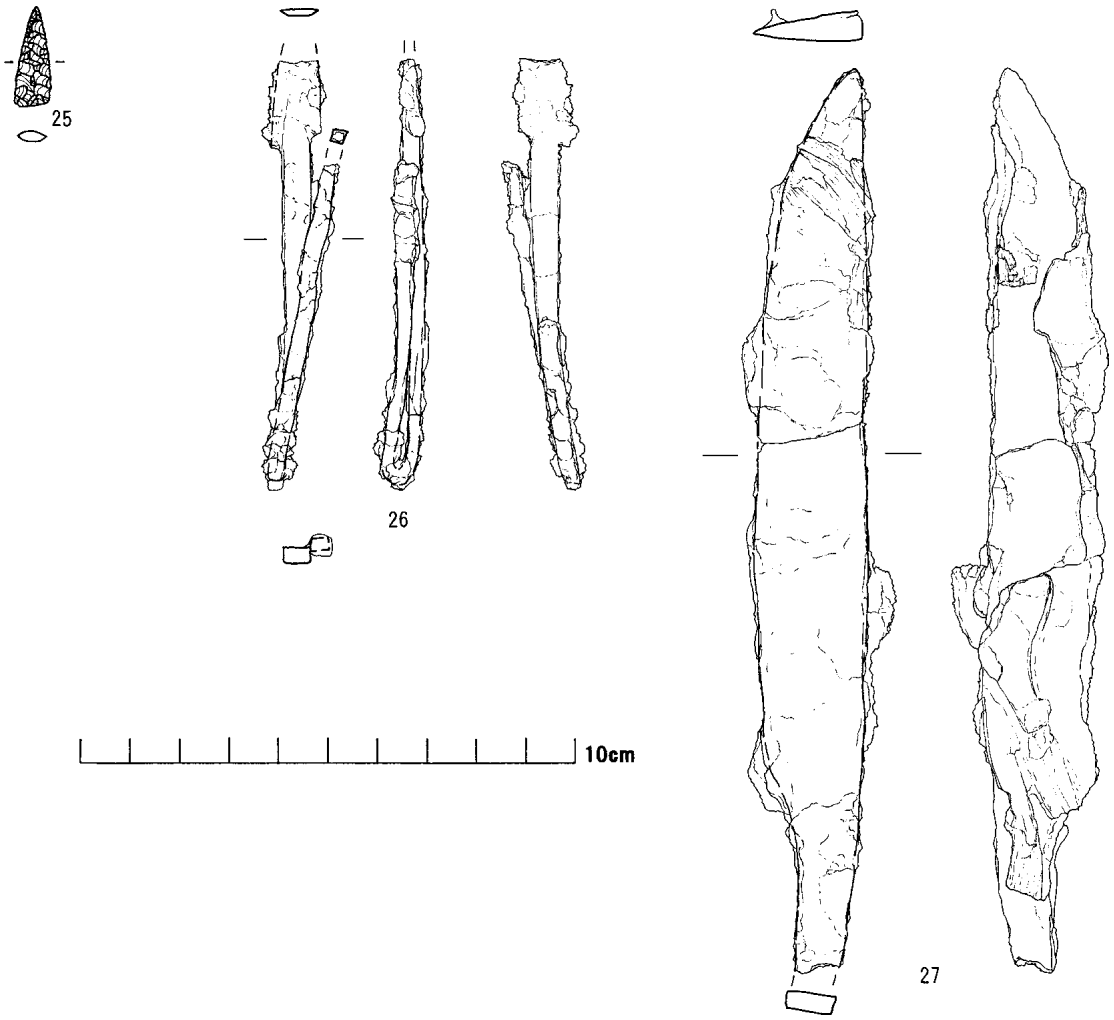
17図. 石器 (1–14).



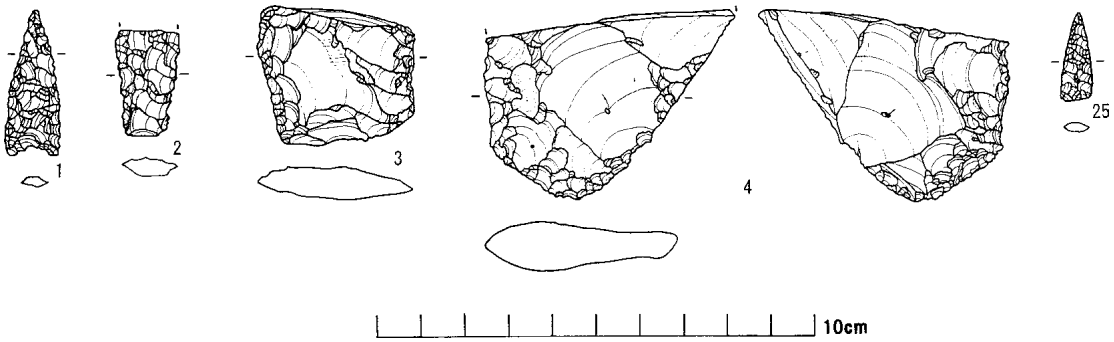
18図. 石器(15–20).



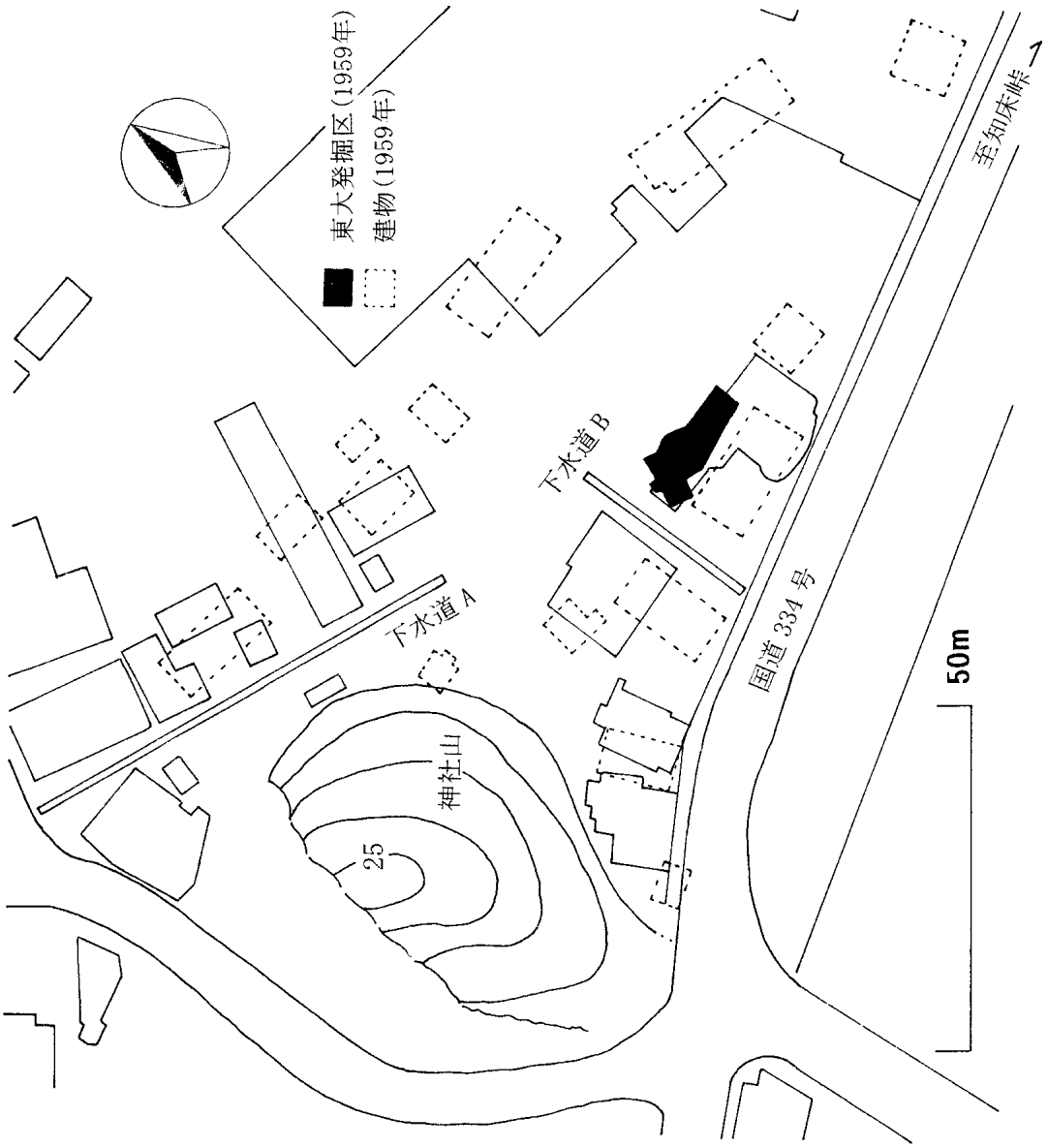
19図. 石器 (21–24).



20図. 2号址出土遺物(25–27).



21図. 原産地分析石器.



22図. 東京大学発掘地点 (1959年).

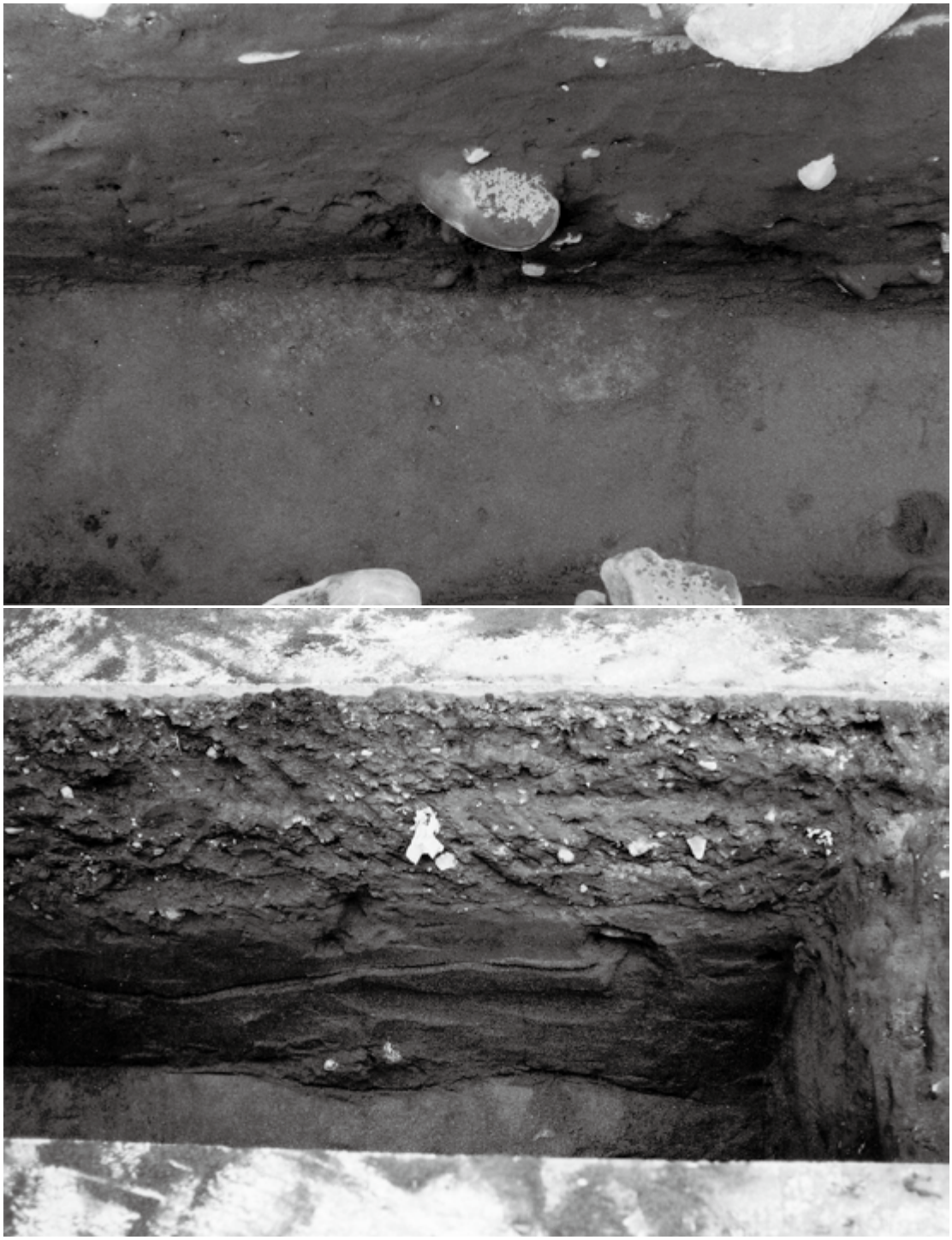
報告書抄録

ふりがな	しゃりちょううとろいせきげすいどう（A・B）ちてんはっくつちょうさ
書名	斜里町ウトロ遺跡下水道（A・B）地点発掘調査
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	豊原熙司，笹田朋孝，井上巌
編集機関	斜里町教育委員会
所在地	〒099-4113 北海道斜里郡斜里町本町12番地，TEL 0152-23-3131
発行年月日	平成24（西暦2012）年10月16日

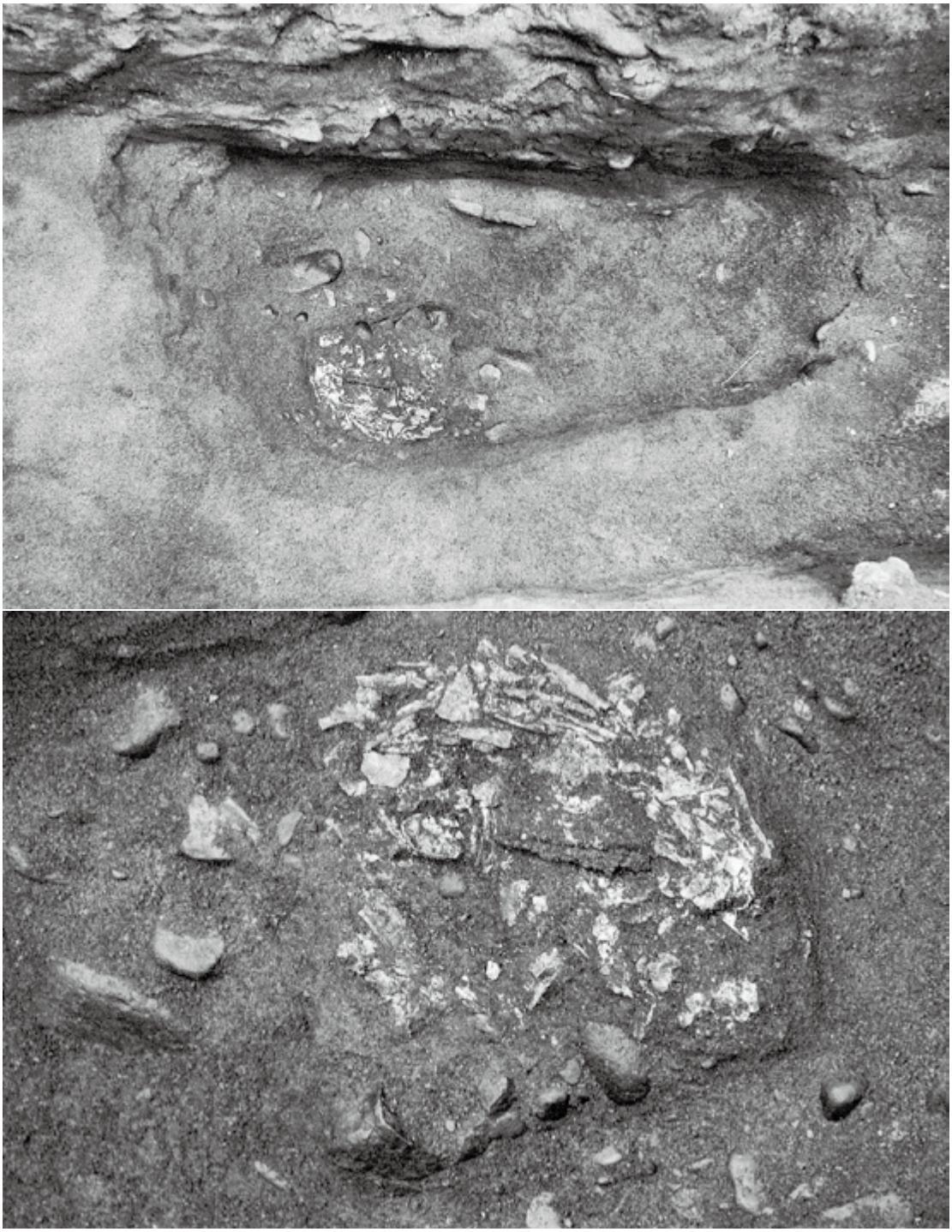
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
斜里町ウトロ遺跡（しゃりちょうウトロいせき）	斜里町ウトロ東（しゃりちょうウトロひがし）	01545	A地点	44° 4′ 20.3″	144° 59′ 38.6″	2008（平成20）年6月1–30日	59 m²	斜里町ウトロ地区下水道新設工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査
			B地点	44° 4′ 8.6″	144° 59′ 43.6″		29 m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
斜里町ウトロ遺跡下水道（A・B）地点	集落址 遺物包含地	続縄文期 オホーツク期	続縄文期の住居址 オホーツク期の住居址，墓	続縄文期（土器，石器） オホーツク期（土器，石器，刀子，鉄鏃）	オホーツク期の火葬骨墓

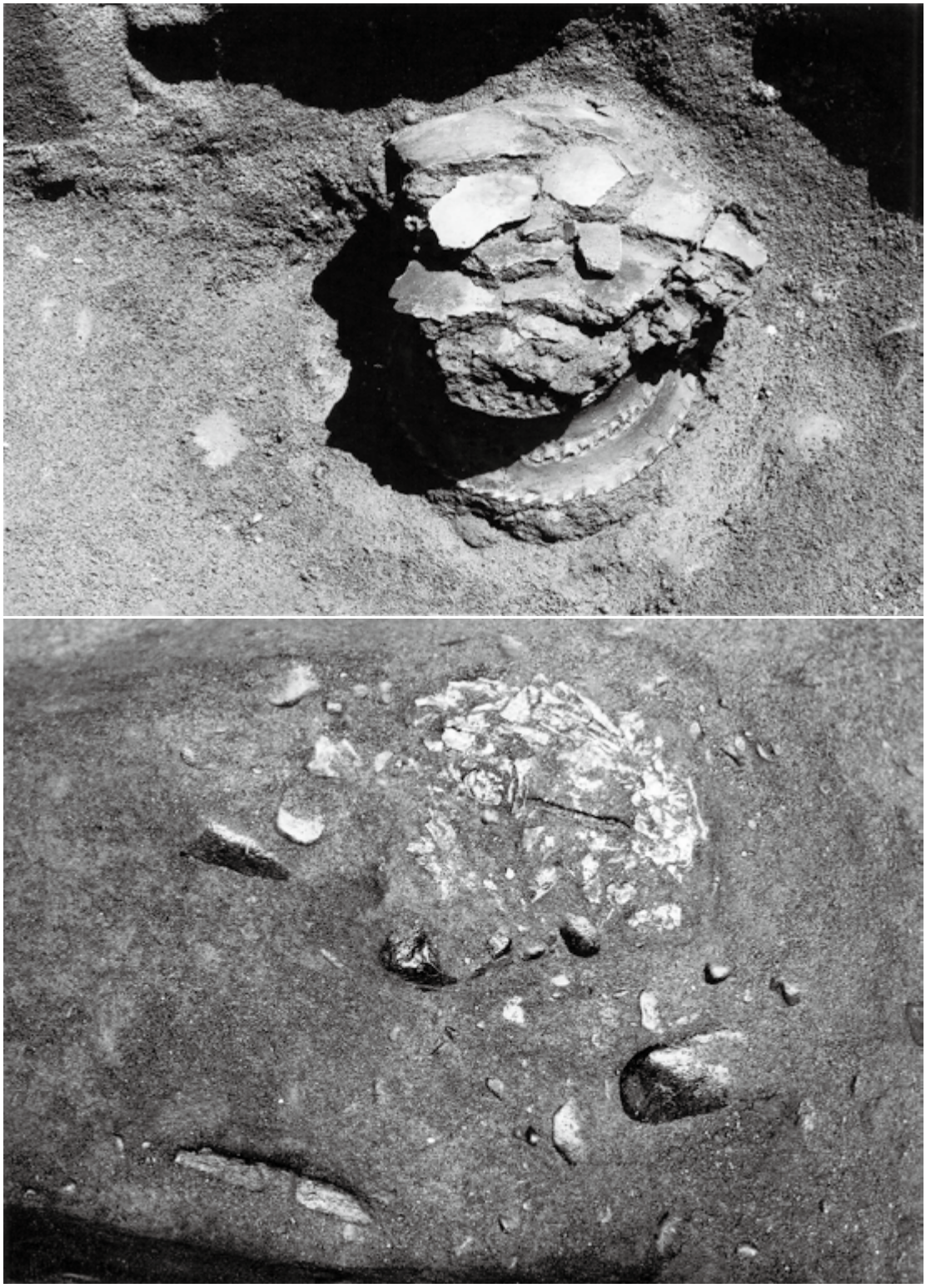
図版 1.　下水道 A 地点.



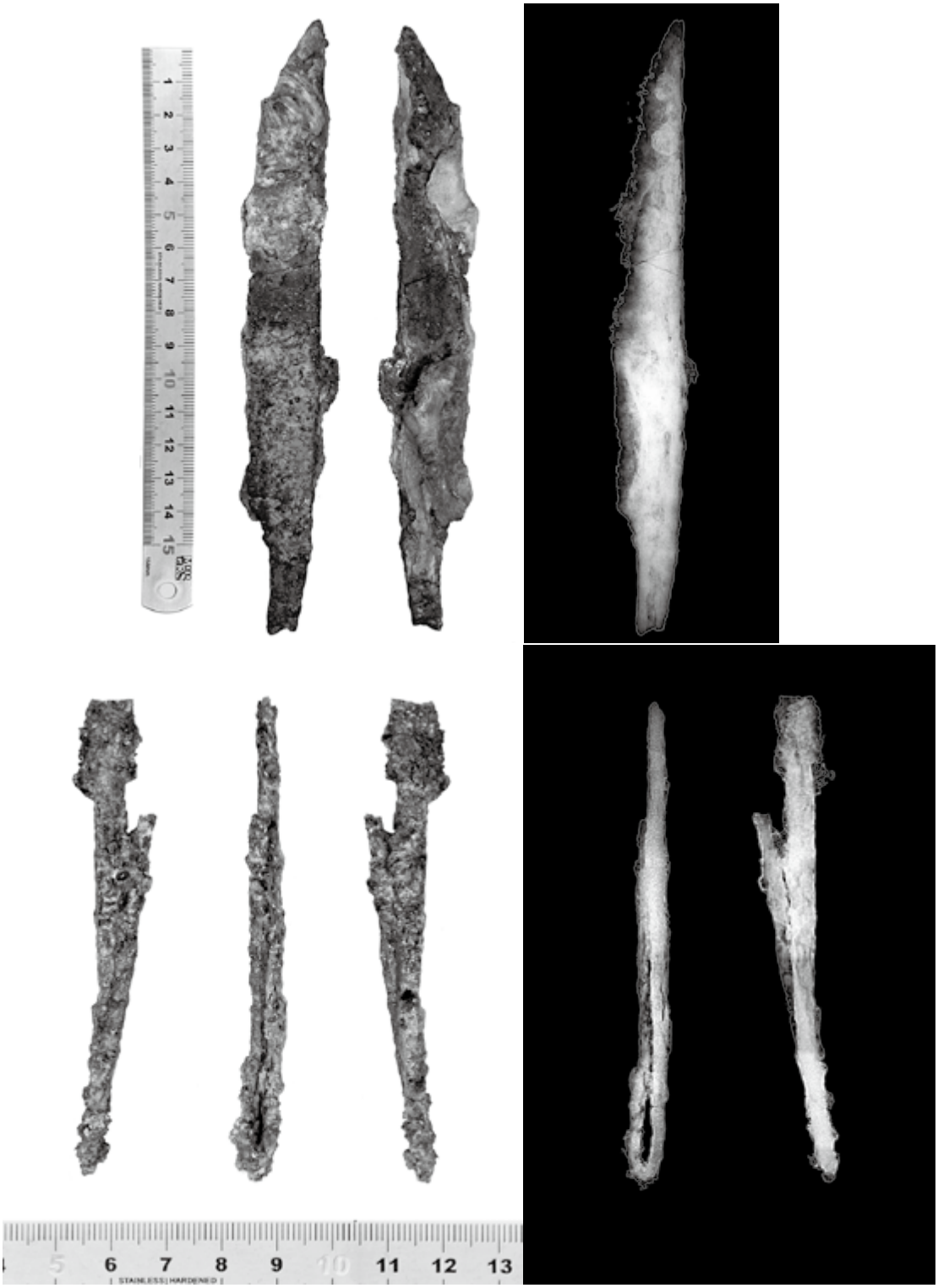
図版2. 下水道B地点（1号址）.



図版 3.　下水道 B 地点 (2 号址).

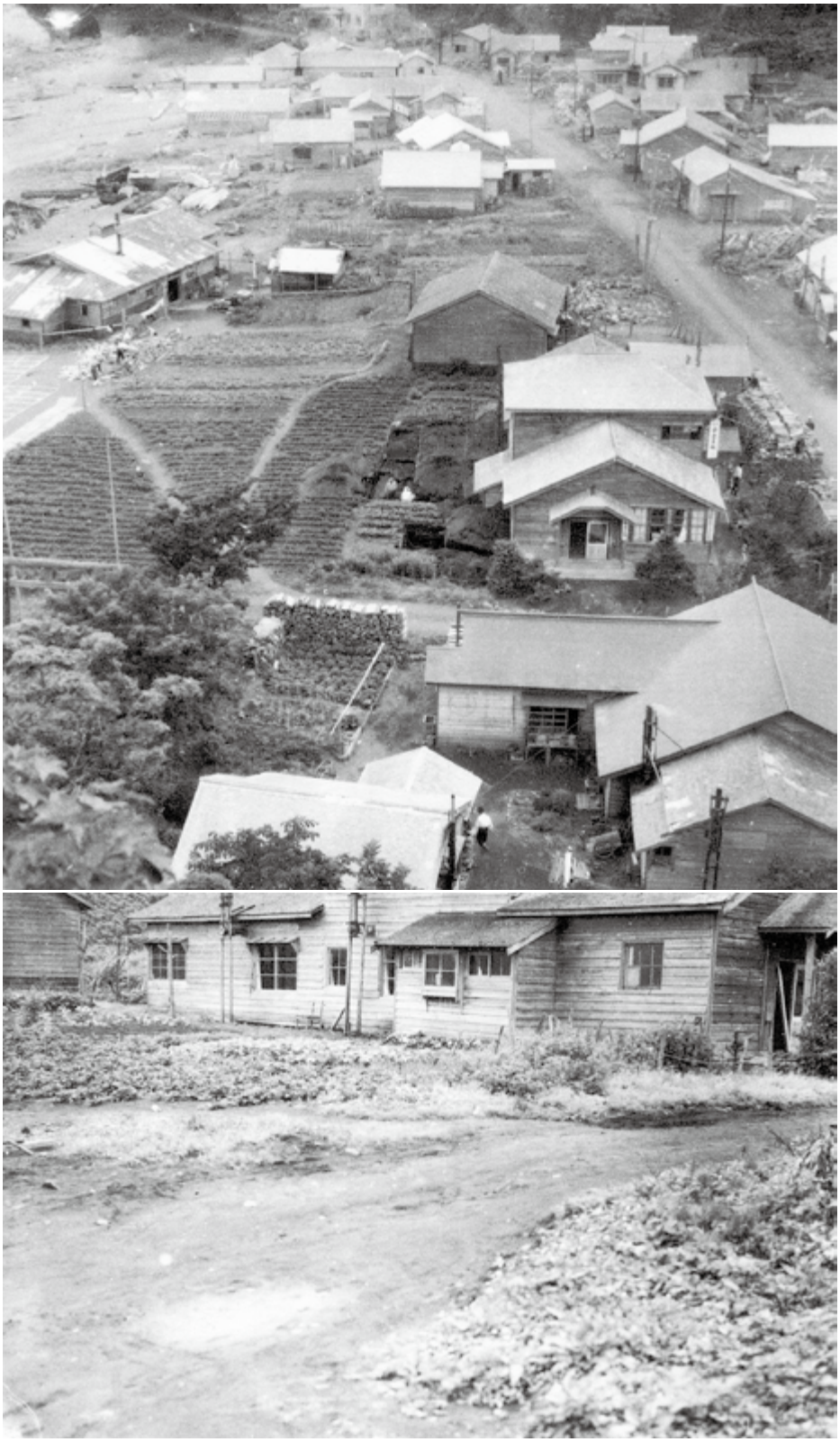


図版4. 下水道B地点（2号址）.



図版 5.　上：2 号址出土曲手刀子（右：X 線写真）．下：2 号址出土鉄鏃（右：X 線写真）．

図版6. 下水道B地点（完掘状況）.



図版 7.　東京大学発掘地点（1959 年：東京大学提供）.